



企画・編集

グローバル・クラスルーム日本委員会  
Japan Committee for Global Classrooms

監修・発行

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター

発行年月日: 平成 24 年 6 月 24 日

Japan Committee for Global Classrooms

# Global Classrooms

## グローバル・クラスルーム 報告書

高校模擬国連国際大会への第 6 回日本代表団派遣支援事業



2012 年 6 月

グローバル・クラスルーム日本委員会  
Japan Committee for Global Classrooms



公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター

Global Classrooms

目次

はじめに..... 1

グローバル・クラスルームとは..... 2

日本模擬国連とは..... 3

企画概要..... 4

派遣報告..... 5

受賞..... 9

参加者報告..... 10

支援協力団体一覧..... 34

会計報告..... 35

共催団体より..... 36

グローバル・クラスルーム日本委員会... 37

おわりに..... 38

参考..... 39

【後援】

外務省  
 経済産業省  
 文部科学省  
 国際連合広報センター  
 国際連合大学  
 財団法人日本国際連合協会

【協賛】

株式会社公文教育研究会  
 メリルリンチ日本証券株式会社  
 三菱商事株式会社  
 株式会社新日本科学  
 株式会社JTB  
 トヨタ自動車株式会社  
 一般財団法人凸版印刷三幸会  
 株式会社ニチレイ  
 株式会社講談社  
 三井物産株式会社  
 株式会社ナガセ 東進ハイスクール  
 学校法人高宮学園 代々木ゼミナール  
 駿台予備学校

\* ご賛同順 6月1日現在

【協力】

理想科学工業株式会社  
 日本航空株式会社  
 読売新聞  
 日本経済新聞  
 株式会社リクルート

\* ご賛同順 6月1日現在

## はじめに

この度、高校模擬国連国際大会への6回目の日本代表団派遣支援事業の報告書を皆様にお届けできる運びとなりました。本事業にご共催いただいた公益財団法人ユネスコ・アジア文化センターをはじめ、ご後援いただいた関係省庁・団体等、多くの皆様からの温かいご支援・ご高配を賜りました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

本事業では、2011年11月12-13日に東京の国連大学で行われた第5回全日本高校模擬国連大会において優秀な成績を収めた5校10名の高校生が、日本代表団として国際大会に参加いたしました。そして、ジンバブエ共和国の大使として、世界24カ国、総勢約2500名の参加者を前に今大会においても見事な存在感を発揮しました。

本報告書で大部分を占めているのは日本代表団10名の高校生の報告です。10名の高校生がアメリカ・ニューヨークでそれぞれが担当する会議の議場において感じたことが全て記されています。会議前、会議中、そして、これから将来に向けての各人の様々な思いが読み取れる内容です。その思いが今後のそれぞれの活動に少しでも刺激を与えるものとなるのであれば、私どもとしてこれ以上の喜びはありません。

最後に、本書が多くの人に読まれ、日本における高校模擬国連活動の更なる普及と発展の一助になること、そして、これから国際舞台に関わろうとする多くの人の活力につながることを期待しております。今後とも、グローバル・クラスルーム日本委員会へのご支援・ご指導をよろしくお願いいたします。

グローバル・クラスルーム日本委員会  
2012年度 理事長 大内 悠路

## グローバル・クラスルームとは

グローバル・クラスルームは、国連会議のシミュレーション（模擬国連）を通じて、現代の世界におけるさまざまな課題について学ぶための先進的な教育プログラムとして、公立中学校・高校を対象に、米国情連協会の提唱により始まりました。模擬国連に参加する学生は、国連加盟国の大使として、国際問題を討議し、決議案を作成し、賛成者・反対者と交渉し、国連の議事規則を駆使して、世界が直面する課題の解決に向けて、「国際協力」を実現していきます。

米国情連協会は、このグローバル・クラスルームを米国諸都市のみならず世界各地に普及させることで、国際理解教育と模擬国連の良さを多くの国の学校と共有するとともに、模擬国連コミュニティの裾野を広げようとしています。グローバル・クラスルームは、既に中国、インド、ドイツ、レバノン等で始まっています。

日本でも、大学生の模擬国連は30年以上の歴史があり、毎年模擬国連会議全日本大会が開催されています。そして2007年、かねてより若年層に対して国際問題を討議する際に欠かすことができない経済や国際金融の知識の普及活動をグローバルに行ってきたメリルリンチ社をスポンサーに迎えグローバル・クラスルーム日本委員会が組織され、同年の第一回日本代表団の国際大会への派遣を皮切りに高校生の模擬国連活動が始まりました。

グローバル・クラスルーム日本委員会  
Japan Committee for Global Classrooms



日本模擬国連（Japan Model United Nations: JMUN）は、日本で始めて組織化された模擬国連活動を行う団体です。

1983年上智大学において、当時上智大学教授だった緒方貞子（国際協力機構特別顧問／元国連難民高等弁務官）の顧問の下、発足した「模擬国連実行委員会」を前身としています。当初は毎年ニューヨークで開催されている模擬国連会議全米大会（National Model United Nations Conference）への日本代表団の派遣を中心に活動を行っていましたが、委員会の規模拡大に伴い、日本における模擬国連活動を本格化させ、名称を模擬国連委員会に改名しました。また、2010年から、模擬国連委員会は、名称を改めまして日本模擬国連となりました。

日本模擬国連は、模擬国連会議などの学習を通じて国際社会に貢献する人材を育成することを使命としています。日本模擬国連は国際社会を考える一つの方法であると同時に、価値観や国籍の壁を越えて人と人をつなぐネットワークでもあります。また、国際社会に貢献できるたくさんの人材を育成・輩出し、当委員会の活動に参加していた先輩たちは、さまざまな省庁や国際機関、民間企業、非政府組織、学術機関など多分野に渡って国際社会に貢献する活躍をしています。

日本模擬国連  
Japan Model United Nations

## 日本模擬国連とは

## 企画概要

### 企画名称

2012年度高校模擬国連国際大会への  
日本代表団派遣支援事業

### 期日

2012年5月15日（火）～21日（月）

### 開催場所

米国ニューヨーク市

### 主催団体

グローバル・クラスルーム日本委員会

### 内容

5月中旬に米国国連協会の主催により開催される高校模擬国連国際大会（13<sup>th</sup> Annual Global Classrooms International Model UN Conference）に、グローバル・クラスルーム日本委員会主催の第5回全日本高校模擬国連大会（Global Classrooms in Japan 2011）にて選出した高校生が日本代表団として参加することへの支援。同大会には米国国内の21都市を含む世界24か国から総勢約2500名の高校生が参加した。

## 参加者名簿

### 1) 日本代表団（10名）

栄光学園高等学校

青木 達也、五十嵐 宇晴

慶應義塾湘南藤沢高等部

斉藤 初雲、鶴原 幹

実践女子学園高等学校

齋藤 優香子、坂井 まな

渋谷教育学園幕張高等学校

林 由季、関根 雪菜

聖心女子学院高等科

古賀 祐海、光本 愛理

### 2) 引率教員（5名）

栄光学園高等学校

李 聖一

慶應義塾湘南藤沢高等部

ルサレビアン フィリップ

実践女子学園高等学校

奥井 雅久

渋谷教育学園幕張高等学校

小原 誠

聖心女子学院高等科

平方 久美子

### 3) グローバル・クラスルーム日本委員会 （2名）

東京大学法学部

渡部 智（研究担当）

慶應義塾大学法学部

柴原 一貴（理事長補佐）

### 3) 公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（1名）

康 武司

## 派遣報告

### 派遣日程

4月22日(日)	インフォメーション・セッション
5月15日(火)	NY到着
5月16日(水)	国連日本政府代表部訪問 現地高校訪問
5月17日(木)	中満泉様事務所訪問 模擬国連会議開会式
5月18日(金)	模擬国連会議 1日目
5月19日(土)	模擬国連会議 2日目 閉会式
5月20日(日)	NY出発
5月21日(月)	日本帰国
6月24日(日)	渡米報告会



### 参加会議

高校	担当会議	議題
栄光学園高等学校	International Monetary Fund	External Debt Sustainability and Development
慶應義塾湘南藤沢高等部	General Assembly Sixth Committee	Criminal Accountability of United Nations Officials and Experts on Mission
実践女子学園高等学校	International Atomic Energy Agency	Effects of Atomic Radiation
渋谷教育学園幕張高等学校	General Assembly First Committee	Towards a Global Arms Trade Treaty
聖心女子学院高等科	General Assembly Regional Committee	UN Conference on Sustainable Development(Earth Summit / Rio+20)

## 4月22日

### 【インフォメーション・セッション】

メリルリンチ日本証券のオフィスの一室にて、渡米前の説明会および研究発表会を行いました。評議員による激励の言葉を受け、国際大会に向けて生徒たちも決意を新たにしました。

研究発表会では、会議ごとに設定されている議題について自分たちの担当国の政策を英語で発表しました。生徒たちによる英語での発表、それに対するフィードバックを通して担当会議・議題の理解を深めてもらいました。

また、国際大会に参加した際の戸惑いを少しでも少なくすることと会議の経験を増やすために一昨年から行われている練習会議を今年も実施しました。その際には過去の国際大会派遣生も集まりました。様々なアドバイスを受け、派遣団にとっては貴重な時間となりました。



## 1st Day

### 【日本出発・ニューヨーク到着】

成田国際空港からニューヨークのジョン・F・ケネディ国際空港へ向けて出発しました。当初は緊張した面持ちであったものの、しばらくするとみな打ち解け、リラックスした様子で出発しました。

ニューヨーク到着後はしばらく自由時間とな

りました。あいにくの天気でしたが、各生徒はニューヨークの街を散策するなど、それぞれ思い思いの時間を過ごしました。



## 2nd Day

### 【国連日本政府代表部訪問】

午前は、国連日本政府代表部を表敬訪問しました。中前隆博公使から、国連における日本の取り組みについてのお話や模擬国連会議に向けた激励のお言葉をいただきました。質疑応答では国連での仕事内容や働くきっかけのみならず、担当する会議の議題に関する質問などもありました。話が終わった後、個人的に大使に質問に行った高校生も多く、大きな刺激を受けたものと思われま





## Global Classrooms

## 【現地高校訪問】

午後は、国際大会の主催者である UNA-USA の紹介で、現地の学校訪問を行いました。今年度は Manhattan Center for Science and Mathematics との交流を行い、お土産の交換やニューヨーク自然歴史博物館の見学などを行いました。非常に有意義なひとときを過ごしました。



## 3rd Day

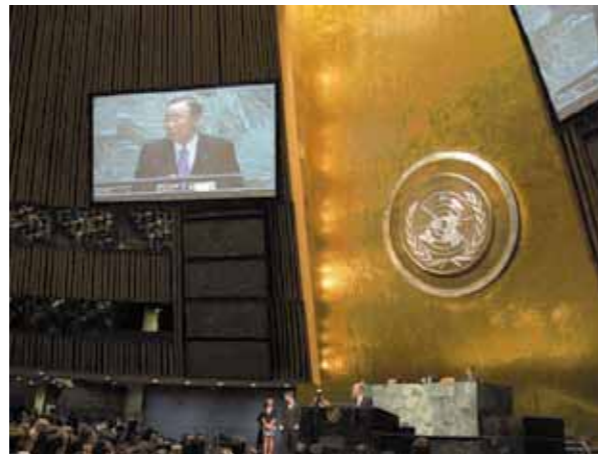
## 【中満泉様事務所訪問】

国連平和維持活動局政策・評価・訓練部長の中満泉様の事務所を訪問しました。国連でのお仕事について具体的なお話を聞くことができ、高校生にとってはまたとない機会となりました。



## 【開会式】

各国から集まった大勢の参加者が国連本部の総会本会議場に集いました。初めての総会本会議場ということで興奮していた高校生たちも、潘基文事務総長のスピーチを聞くにつれ、次第に真剣な眼差しに変わりました。



## 4th Day

## 【模擬国連会議 1 日目】

模擬国連会議が滞在先の Grand Hyatt Hotel で行われました。200 人以上が集まる会議や少人数の会議など参加する会議の規模は様々でしたが、全チームが自国の国益を達成すべく真剣に交渉をしていました。



## Global Classrooms

## 5th Day

## 【模擬国連会議 2 日目】

2 日目も Grand Hyatt Hotel で会議が行われました。高校生たちは、夜遅くまで 1 日目の反省を踏まえ、会議戦略の練り直しを行っていました。チームによって国益の達成度は異なったものの、全てのチームが最後まで諦めず、粘り強い交渉をしていました。



## 【閉会式】

会議終了後すぐに、開会式と同様、国連本部にある国連総会本会議場で閉会式が行われました。閉会式では栄光学園高等学校、慶應義塾湘南藤沢高等部、渋谷教育学園幕張高等学校が Honorable Mention 賞を聖心女子学院高等科が Best Position Paper 賞を受賞しました。高校生たちは大きな疲労の中でも会議を無事に終えることができた達成感、充実感に満ちていました。



## 6th=7th Day

## 【ニューヨーク出発・日本帰国】

長くも短くも感じた全日程を終え、ジョン・F・ケネディ国際空港を出発し日本に帰国しました。それぞれ悔しさや嬉しさを胸にしなが、何かをやり遂げたという達成感、充実感に満ち溢れていたのではないのでしょうか。





## 受賞

### 【Honorable Mention 賞】

栄光学園高等学校  
International Monetary Fund  
External Debt Sustainability and  
Development

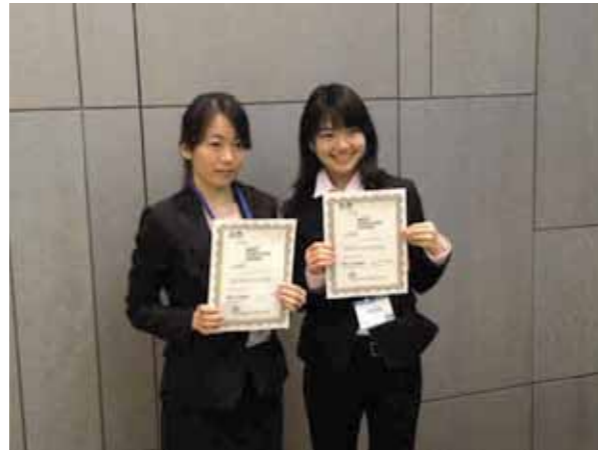
慶應義塾湘南藤沢高等部  
General Assembly Sixth Committee  
Criminal Accountability of United Nations  
Officials and Experts on Mission

渋谷教育学園幕張高等学校  
General Assembly First Committee  
Towards a Global Arms Trade Treaty



### 【Best Position Paper 賞】

聖心女子学院高等科  
General Assembly Regional Committee  
UN Conference on Sustainable Development  
(Earth Summit / Rio+20)



## 柴原 一貴

慶應義塾大学法学部政治学科 2年  
グローバル・クラスルーム日本委員会 理事長補佐

初めに今回の日本代表団派遣支援事業にご協賛及びご後援いただいた全ての諸団体の皆様並びに、グローバル・クラスルーム日本委員会に関わって下さった全ての方々に御礼を申し上げます。

今回の日本代表団派遣支援事業には当委員会理事長補佐の柴原がアドバイザーとして、研究の渡部が高校模擬国連国際大会会議スタッフとして日本代表団に同行させて頂きました。当事業に参加した高校生の会議に対する取り組み及び、模擬国連活動の有用性の二点を以下で述べ私からの派遣報告とさせていただきます。

まず、一点目の当事業に参加した高校生の会議に対する取り組みについて記します。当然のことながら、会議は全日本高校模擬国連大会と異なり全て英語にて行われます。二年前の私がそうであったように、海外経験が豊富でない派遣生は自分自身の意見を英語で相手に上手く伝えることが出来ず、会議の輪の中に入っていくことに対し、しばしば恐怖すら覚えます。しかし、今年の日本代表団は海外経験を十分に積んだ生徒が集まっており、外国人相手に臆することなく交渉に望んでいました。高校生から五年間模擬国連活動を経験している私は会議一日目において、派遣生の積極的な交渉姿勢は非常に優れていると感じる一方、会議における戦略性が欠如していると感じました。自国の立場及び政策を主張することに意識を取られるあまり、「自分自身の立場を会議の中でどのように位置づけるか」及び「どのような行動を取れば、話の流れを自分自身に有利な方向へと導くことを出来るか」といった戦略的な部分にまで考えが至っていなかった様に思われます。会議一日目の終了後、大学生を交えつつ一日目の反省を踏まえながら二日目の会議準備を行いました。派遣生はそれぞれなりに「国益の達成」及び「賞をとる」ことを念頭に置き、夜遅くまで議題に対して真剣に向き合っていました。会議二日目、準備したことを全力で且つ戦略的に達成しようとする派遣生の姿を見て、アドバイザーとして感動すると同時に、OB として多少の羨まし

## 参加者報告

## Global Classrooms

さをも感じました。最終的に日本代表団は Honorable Mention 賞三つ及び、Best Position Paper 賞一つという史上最高の結果を手に入れました。今この結果を冷静に受け止め考察した場合、あまり驚きは生まれません。派遣生は世界一とも定評のあるリサーチ量をこなし、コミュニケーション能力及び、他人から言われたことを瞬時に解釈し、自分なりに実践するといった頭の回転の速さなどを併せ持っていました。会議に対する高校生の取り組みの中で高校生の力強さと誠実さを強く感じました。受賞したか否かという表層的な結果に囚われず、今回の渡米における反省を踏まえ、自分自身の成長の糧としてくださることを期待しております。

次に二点目の模擬国連活動の有用性について記します。渡米プログラムを経験した派遣生がそれぞれの世界において目覚ましい活躍をしているということを聞くにつけ、なおも私は模擬国連活動の魅力の虜になっています。当然のことながら、「会議を彩る一大使」として会議に参加するのみでもかけがえの無い経験を積むことが可能です。しかし、「会議を創作する会議監督」「大会自体を運営する立場」を経験すること無しに、模擬国連活動から学ぶことは全て学んだと主張することは出来ないと感じております。私自身、渡米プログラムを終えた当初はやりきったという満足感からか「もう大学では模擬国連活動に関わらない」と決めておりました。しかしながら、全日本高校模擬国連大会の当日スタッフなどで運営に関わっていく内に改めて模擬国連活動の有用性に魅了された結果、今も模擬国連活動に参加し続けています。実際に今、大会の運営を行う立場となり、理想と現実の狭間に絶望させられることがあります。派遣生だった頃、グローバル・クラスルーム日本委員会には「もっとこうして貰いたい」「どうしてそのような事を行うのか」といった不満抱くことが多々ありました。しかし、実際の運営の現状を知り振り返ってみた場合、ある程度理にかなったものであり自分自身が抱いていた希望を実現させることは非常に難しいと理解しました。メイン・スポンサーが変わるという大きな節目にも関わらず、ふと気を抜くと現状維持に甘んじようとした自分がいたことに反省しています。最終日、成田空港にて派遣生から渡米に関するお礼を言われた時、安堵感とともに、「本当に

これ以上当事業の質を上げることは出来なかったのか」という一抹の後悔のようなものが浮かびました。私自身、この派遣にアドバイザーという立場から参加し、派遣生の時に感じる事が出来なかった経験、そして反省材料を手に入れることとなりました。現状維持に甘んじることなく、常に自分自身を客観視しつつ、模擬国連活動の普及のために今後も邁進していきたいと改めて決意し直した次第です。グローバル・クラスルーム日本委員会の理事会を辞める時、模擬国連活動から学ぶことは全て学んだと胸を張り、グローバル・クラスルームという教室から卒業することが出来るよう、努力して参ります。

最後になってしまいましたが、当事業の引率者としてご協力下さった各学校の関係者の皆様、高校生の皆様、保護者の皆様及びに当事業にご協賛及びご後援いただいた関係各者の皆様に改めて感謝を申し上げます。皆様のご協力なくしては当事業を執り行うことは出来ませんでした。今後ともグローバル・クラスルーム日本委員会へ変わらぬご厚誼を賜りますようお願い申し上げます。

## Global Classrooms

## 渡部 智

東京大学法学部 3年  
グローバル・クラスルーム日本委員会 研究

初めに今回の日本代表団派遣支援事業にご協賛およびご後援頂いた諸団体の皆様に厚く御礼申し上げます。

私はグローバル・クラスルーム日本委員会の研究として渡米し、高校模擬国連国際大会のスタッフとして大会の運営に携わるとともに、アドバイザーとして派遣生に対して助言を与えていました。スタッフとして大会の運営に携わった感想、アドバイザーとして派遣生と交流した感想を述べ派遣支援事業の報告とさせていただきます。

大会の運営は社会人を主体としながらもスタッフの多くは大学生であり、全米各地から、また私のように世界各国のグローバル・クラスルーム関係者から集められていました。15個開催される模擬国連会議に関わるスタッフが80名ほど、受付担当やロジスティクスのためのスタッフがその他に30名ほどおり、私はロジスティクス担当として備品の管理や参加者の会場誘導などに携わっていました。大会に何年も参加しているスタッフや、昨年まで高校生で大会の参加者だったというスタッフも皆が割り振られた以上の作業に積極的に取り組み、スタッフ全体で大会を成功させようとする熱気が伝わってきました。リーダーシップに優れ、英語が不得意な私に対しても親切に接してくれ、フェアウェル・パーティーの際にはしっかりと盛り上がる彼らの中から次世代のリーダーが生まれてくることを確信し、そのような指導的な立場に立つ人間を育成するためのプログラムとしての模擬国連の有用性を改めて感じました。

10名の派遣生は、国連日本政府代表部訪問や中満様の事務所訪問やバディー・スクールとの交流など渡米中も総じてリラックスした様子でしたが、国際大会を経験した先輩から会議の話がある程度聞いているとはいえ、世界の高校生と英語で会議をする不安からか会議前日の夜はさすがに緊張している様子でした。2日間、合計12時間で行われる会議が実際に始まってみると、1日目の出来はそれぞれのペアで異なっ

ていましたが、1日目の会議後にペア同士で、派遣生同士で、そして大学生と共にその日の反省を行い翌日に向けての準備を行うなど、良い緊張感を保ったまま会議に臨んでいたと思えました。賞をとるために、1日目の失敗を挽回するために、それぞれ目的は違っていました。皆がとても真剣に模擬国連に向き合っていました。

大学生による模擬国連を経験している私の視点からみると、派遣生は皆英語の能力に優れ、交渉力や発言力に優れていると感じましたが、その反面、先の展開を見通した上で時間をどのように使っていくかという視点が甘いとも感じました。どのような手順で説得を行い、合意を形成し、支持を得るか。派遣生の皆さんにはぜひ模擬国連を通じてこれらの技術を会得してほしいと考えています。

結果として日本代表団は優秀賞3校、ベスト・ポジションペーパー1校と史上最高の結果を残すことが出来ました。しかし私はこの結果にはあまり驚いていません。環境問題、通常兵器、原子力、そして対外債務や国際的な裁判管轄権に関わる問題など一般的な高校生が扱うには不釣り合いなほど難解な議題に対して、派遣生は入念なりサーチを重ね、自ら考え、ペア同士で話し合い、時に先生や大学生に相談をしながら、政策を作り上げ、文章にまとめ、口頭で表現する練習を3ヶ月にわたって熱心に行ってきました。受賞はその結果に一つの表れに過ぎず、賞を取る取らないに関わらず3ヶ月間頑張ってきた派遣生一人ひとりの努力に対して敬意を払うとともに、彼らと共に努力を重ねてこられたことを誇りに思います。

派遣生の皆さんが将来の日本、世界に貢献できる人間になり、またOB/OGとして模擬国連活動の普及、後進の指導に携わってくれることを今からとても楽しみにしています。



## Global Classrooms

## 青木 達也

栄光学園高等学校 3年

"The delegates of Zimbabwe!"

—印象的だった大使が次々と表彰されていく中で、突然私の担当国であるジンバブエが呼ばれた。優秀賞を受賞したのだ。

担当会議の議題は "External Debt Sustainability and Development" (対外債務持続可能性と発展)。会議のリサーチ開始当初、External Debt という言葉が何を示すのかすら明確には答えられないという悲惨な状態だった。そこで相方の五十嵐はジンバブエの政策、私は議題に関係する総合的な情報、と二人でリサーチを分担しお互い話し合いながら共通認識を作った。最終的に教育や保健などの Social Development をベースにした 2 つの政策を立案。実際の決議において示唆があった、新たな債務免除プログラムと低金利の融資の設立を訴えていくことになった。そして、民なくしては成長なし。それを念頭においた決議を作りたいと五十嵐とは何度も話していた。なぜなら、リサーチを進めれば進めるほど、学校の倫理の授業でテレビ画面を通して見る貧困や飢餓といった問題が、決議という名の紙切れに大きく影響されているということを感じ、何か自分たちにできないのだろうかという問題意識は高まる一方、自分の無力さを思い知らされたからだ。だからこそ、せつかく模擬国連という場で何か形を残すならば、もっと「人」に重きを置いた決議を作りたいと思っていた。

ゴールデンウィーク前まででポジションペーパーを含め全ての準備を終えてたので、会議前日まで特に新たな準備はせず、相方と少し話して会議行動を確認する程度だった。ニューヨーク到着後から会議までの間に、国連日本代表部の中前隆博公使や PKO 局政策部長の中満泉氏にお話を聞く機会があったが、中前公使が語ってらっしゃった「平和」に対する世界と日本の考えのギャップ、そして中満氏の世界と日本の PKO 活動に対するメディアの認識の違いに関するお話が印象に残った。お二人の話に共通していたのは、日本人が理想としがちな「倫理感」からの「国際協力」が必ずしも世界には通用しないということ。自分が将来進むつもりである

ビジネスの道からどうやって国際問題にアプローチできるだろうか、と考えさせられた。

そしてついに会議一日目。あつという間に会議が始まった。幸運にも初日のジンバブエの席は最前列に配置されており何が起きているのかの把握に苦労することは無かった。最初の Un-moderated Caucus でポーランド大使や隣に座っていたアルバニア大使らと協力し、Social Development の重要性を意識した決議を作る動きになった。私は自分の取り入れたい文言は全てメモに書いていたのだが、他の大使の協力のお陰でそれをほぼそのまま決議に書き入れることに成功。あとはどうやって会議上でのプレゼンスを高めるかが問題となった。ニューヨーク大会は全日本大会と異なり Moderated Caucus という着席型討議が頻繁に行われるのだが、その中での様々な大使の発言を聞いていると、どうやら低金利の融資については全ての大使が訴えているのに対し、債務免除に関してはジンバブエ以外に主張している国はなかった。そこで、昼休みを挟んで再開された会議で順番が回ってきた公式発言では、用意していた原稿ではなく、発言時間を全て債務免除の重要性について強く訴えることに回した。"Attention, please." そう言ってから公式発言始めたのだが、後から聞いたところによると Chair や Director らが聞き入っていたようだ。グループ形成が済んでからは大きな進展のないまま一日目が終了。ホテルの部屋に戻ってから五十嵐と二人で会議戦略を練り直した。大学生の方からのアドバイスに従い様々な障害を想定したタイムラインを作成。2 つのグループの架け橋となってコンバイン交渉を成立させることにより、グループのトップに立とうと考えた。

会議二日目。会議が再開する前に交渉や協力関係を築くなどバタバタ動いている中で議長に前夜に作ったタイムラインを見せ、どこでどう動議を取りたいかを伝えた。すると「ゲストスピーカーが昼前に来て会議を中断するからコンバイン交渉を行う時間はないよ。」という一言。そこでその場でもう一度戦略を立て直し、グループのトップに立つのではなくナンバー2 の立ち位置を確立すると同時に、他のグループに債務免除に関する文言を取り入れてもらうことで議場全体でのプレゼンスも高めることにした。

## Global Classrooms

トップに立っているわけではなかったので、あちこち動き回り、Moderated Caucus で発言できるチャンスがあればことごとく発言し、がむしゃらに動いた。自分はゲストスピーカーの話もほとんど聞かずに、次に話せる機会のためどんなことを話せばよいかメモにまとめるなどしていた。その努力をフロントが見てくれたのだろう。結果的に混乱の中 7 個の決議が議場に提出され、1 個がたまたま通過した以外、自分の属していたグループの決議も含め全ての決議が否決されたのにも関わらず、最優秀大使賞に次ぐ Honorable Mention を受賞したのだ。自分の属していたグループが一番評価されていたようで、全体での表彰は 10 カ国以下であったのに、最優秀大使に加えてジンバブエを含む 4、5 カ国が選ばれた。

さて、今回、ニューヨーク大会出場に際し、本当にたくさんの方に助けて頂いた。過去の派遣団の方々（特に 5 期派遣生）には個人的に何度も過去の経験を教えてもらった上、自分達の会議戦略に対しても様々なアドバイスをもらった。また、大学生の方々や学校の先生方にはポジションペーパーの添削等をして頂いた。そして応援し続けてくれた友達、家族、この派遣事業のサポーターである幾つもの団体の方々。この中の一つでも欠けていたら、きっとこのような誇らしい結果にはなっていなかった。

優秀賞の受賞も嬉しかったが、会議が終わった瞬間から充実感でいっぱいだった。それはニューヨーク大会を通して、刺激を与えられる友人が世界中に何人もできたこと、そして、英語という大きな言語の壁は、本当に伝えたいことがあれば必ずしも乗り越えられないわけではないんだという自信から来たものだと思う。

「国際理解」「国際協力」。

—たった 4 文字のありふれたこれらの言葉は、こういったかけがえのない経験から真に生まれてくるものなのかもしれない。この派遣事業が国際理解を生み出すような意義のあるものであったことを、会議と同じくらい、いや、それ以上に努力しいつかはっきりと示してみせたい。

最後に改めて、全ての関係者に感謝御礼申し

上げます。貴重な経験をさせていただき、本当にありがとうございました。多くの高校生がこの素晴らしいプログラムに参加できるように切に願っています。





## Global Classrooms

## 五十嵐 宇晴

栄光学園高等学校 3年

私が模擬国連を初めて知ったのは、昨年の夏のことです。今はパートナーである青木君に、「一緒に模擬国連参加してみないか」そう誘われたのが全ての始まりでした。模擬国連の「も」の字も知らなかったあの頃から一年弱。全米大会に参加する資格をいただき、大会では優秀賞を手にし、今では派遣生 OB としてこの報告書を打ち込んでいますが、正直申し上げて、自分の模擬国連の経験はまだまだ浅いものだと思います。今回の派遣生の中でも二度目の全日本大会で雪辱を果たした方々や、大学で日常的に模擬国連の活動をなさっている先輩方と比べたら、私は少々かじった程度に過ぎません。今でも、模擬国連とは何なのか、どこにどういった面白さがあるのか、その「本質」を完全に理解しているとは言えないと思います。それでも、この短い時間の中で私は、楽しさや辛さ、達成感を味わい、非常に充実した時間を過ごしていました。全米大会に携わった時間、特にニューヨークでの一週間は、私にとって今までになく鮮烈で、極めて濃密な経験として心に刻まれています。

全米大会は、全てが新鮮で強烈でした。開会式前、式が催される国連総会議場ビルのセキュリティチェックの列を待つ間、焼けつくような日差しの中で、私は期待と不安と緊張で心の高まりを抑えることができませんでした。総会議場の大きさに圧倒されながら、潘基文国連事務総長のスピーチを生で聴き、開会宣言の興奮も覚めやらないまま、あっという間に開会式は終わってしまいました。

それから二日間。一時も気が休まることなく時は過ぎていきました。

私と青木が参加した会議は国際通貨基金(IMF)。議題は「対外債務と発展」。担当国であるジンバブエの大使として、自国の利益と国際社会全体の利益とのほざまで、自分たちの主張をしながら、議場の動きに気を配りながら、自分たちの取るべき行動を取っていきました。会議は二日間、4つのセッションにわたって行われます。スピーチ、討議、面と向かって

の交渉と、手順に従って会議は進められていきました。そしてセッション毎に目まぐるしく動く議場。100組超もの大使がそれぞれの動きをしている中で、議場全体の動向を把握するのにも一苦労でした。自分たちの認知できていないところで新たな動きがあるのではないかと常に気を張っていたので、一日目の夜は寝るに寝られない状態でした。滞在中は常に寝不足だったようなもので、気合いで無理矢理疲れを忘れていたように思います。

模擬国連では、全日本大会でも全米大会でも、身も心も削られる思いをしました。だからこそ感じる、議場で思い通り動けたときの満足感、達成感。だからこそこみ上げてくる、受賞者発表で名前を読み上げられた時の喜び、そして安堵感。模擬国連の楽しさ、面白さは、ここにあるのではないかと私なりに考えています。

実際に会議に参加してみて一つ思ったのは、英語は完璧でなくても何とかなる、ということです。言葉がつかえつかえしか出なくとも、発音がネイティブとは程遠くとも、こちらが言いたいことを一生懸命伝えようとする姿勢を見れば、周囲はこちらの話に耳を傾けてくれます。説得することも、議場で存在感を示すこともできます。ただし、それは言っても「何とかなる」レベルであって、大勢を相手にして議論を仕切ったり、グループのリーダーになったりすることは非常に難しく、自分の英語力の限界も強く感じることとなりました。

もう一つ、準備段階のリサーチから本番の会議までの全体を通して強く思ったのは、私たちは所詮高校生である、ということです。前述の通り、私たちは「対外債務と発展」を議題として扱いました。率直に申し上げて、とても難しいと感じました。現実に、大の大人が何年も費やして初めて進歩を見るような問題を、私たち高校生が完全に理解し考察するのは至難の業です。リサーチにリサーチを重ねても、知らないことが多すぎます。実際、私たちの行った会議が内容を伴った実りのあるものであったかと問われれば、多くの疑問符がつくことでしょう。全てを終えた今でも、この問題の一体何を知っているのか私は自信を持ってません。高校生には限界があります。何よりも、歳月によって培われる

## Global Classrooms

経験を私たちは持ち合わせていないのです。今回私は、高校生としての限界と、国際問題がいかに深く難解で、いかに多くの時間と知恵を要するものであるか、ということに身にしみて感じました。そして同時に、もっと多くのことに挑戦したい、もっといろいろな経験を積んで、一人前に物事を考えられるようになりたい、という想いを新たにしました。

ところで、会議が純粋に楽しかったということは先に述べたとおりですが、楽しいのは会議そのものだけではありません。この一大イベントへの参加を通じて、私の世界は広がりました。友達の輪が、文字通り世界に広がったのです。会議中行動を共にすることが多かった人たちとは、会議中に親しくなっていくますし、会議が終わっても新しくできたつながりを大切にしようと、インターネットを通じて今でも連絡を取り合っています。特に、会議では同胞として終始行動を共にした一つのペアの間には、会議が終わる頃には仲間意識のようなものが芽生えていました。そして閉会式、国連総会議場で彼らの最優秀賞受賞の発表を聞いたとき、私は自分のことのように喜びを感じていました。こうした新たな出会いやつながりを経験できる、特に国際的な結びつきを感じることができる、というのもこのプログラムの魅力の一つだと思います。自分の視野もぐっと広がりますし、自分も世界の一部なのだ、ということを実感することができます。

滞在期間中、全米大会への参加以外にも用意していただいていたイベントがありました。現地到着翌日の日本政府国連代表部への訪問、そしてその翌日の中満泉さんの事務所訪問です。世界を相手に働かされている方々のお話を直接伺える、またとない機会でした。国連代表部で私たちの対応を下さった中前隆博公使や、現在 PKO 局で政策部長をなさっている中満さんのお話を伺っていると、ご自身の強い意志や歳月をかけ積み上げてこられた経験、今の仕事に対する情熱がひしひしと伝ってきて、私はその迫りに襟を正される思いでした。圧倒されるあまり、あの方々を遠い存在のように感じ、憧憬の念を抱いている自分がそこにはいません。そして同時に、自分が将来、あの方々と同じような分野で働かないにしても、同じような姿勢で

世界と互角に渡り合える人間になれば、と目指すべき自分の姿を垣間見たような心地がしました。

些細なことかもしれませんが、派遣生同士の絆が深まった、ということもこのプログラムの実りの一つとして付け加えさせていただきたいと思います。全日本大会では互いに賞を争い合う競争相手だった者同士が、準備から滞在中にかけての数か月を通して戦友、同志へと変わっていき、最後には何物にも代えがたい絆で結ばれていました。これからも長きにわたって付き合い合える友人を得られたことは、きっと私のこれからのにとってプラスとなると確信しています。

最後に、この派遣事業を運営し、終始私たちを支えて下さった、グローバル・クラスルーム日本委員会の皆様、ユネスコ・アジア文化センターの皆様、そしてその他大勢の方々、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。皆様方の支えなくして、このプログラムが実りあるものになることはありませんでした。これからも、一人でも多くの高校生がこのプログラムに参加し、私と同じような、あるいはそれ以上の経験をして、成長の糧としてくれることを願っています。





## 齊藤 初雲

慶應義塾湘南藤沢高等部 3年

## 5月16日 国連日本政府代表部訪問

この日は日本政府の代表、中前隆博公使を訪問。政府の代表として国連で働いている中前公使の貴重な話を伺うことができた。特に自分が関心を持ったのが日本での「平和」の追求についての話。国連という国際的な組織で各国は自分の主張、或いは目標を提示し、それを成し遂げようとする。そこで日本は世界平和を第一の目標として掲げていると中前公使は教えてくださいました。欧米でいう「平和」は戦争がない状態を指すが、広辞苑で調べると「穏やか、平穏であること」を示している。要するには、ある国がたとえ戦争中であっても、国民が飢餓にさらされているような状況は平和ではないと中前公使は主張した。一人一人の人間が貧困、迫害などを逃れ、安全保障が維持されることを日本は追及している。しかし、平和を主張するだけでは物足りなく、日本のミッションとして「唱える平和だけでなく、実践する平和」を推進することが非常に重要。具体的に言うと、ODAの額ではなく、その使い道に注目すべきだと中前公使は言う。話を終えて自分は、平和を唱えるのは簡単且つ当たり前のことだが、現時点で未解決問題が多々あることを考えると、それを実践するのは容易ではないと感じた。

5月17日 国連平和維持活動局政策部長  
中満泉さん訪問

中前公使訪問の翌日、僕たちは国連平和維持活動(PKO)局の政策部長を務めている中満泉さんを訪問。この時点で自分は既に連日世界の政治を先導し活躍している人物と対談できることに感激していた。特に、自分の議題が平和維持活動に関連したものだだったのでとてもラッキーだった。中満さんは最初 PKO 局の構造、そして局内の各部門(軍事部門、オフィス部門、政策部門等)の役割を説明。国連の批評家にも称賛されている平和維持活動だが、最大の弱点が徴兵に要する時間だという。安保理で PKO 遂行が決定してから兵の派遣まで6ヶ月という準備期間が必要であり、円滑なオペレーションを妨げている。また、途上国から派遣される要員は英語ができなかったり、車が運転できなかったりなど、PKO 要員として最低限の能力

さえ有してないことがあると中満さんは懸念を表した。特に PKO のような危険を伴うミッションにはより優秀な人材が赴かないといけない。そこで欧米などの先進国に派遣を要請しているのだが、現在のヨーロッパ諸国は昔の失敗のせいで PKO に対して懐疑的であり、独自のミッションに動員している。それでも、まともな国であるという象徴として派遣要請を受けることを期待しているという。その反面、日本では PKO 要員の派遣要請を受けることがメディアに批判されるほど嫌がられていると中満さんは不満を言った。また、中満さんは日本の若年層の消極性を嘆いた。受身の姿勢が特徴の日本の社会でいかに国を先導していき、未来を自分で切り開いていくのが大切かを強調。「未来は誰かにつくってもらんじゃなくて、自分でつくるのだ」という言葉は未だに心に響いている。

## 5月17日-19日 会議

僕は悔いだけが残らないことを念頭に人生最初で最後の高校生国際大会に挑んだ。結果から言うと、14個ある優秀賞の一つを受賞した。最優秀賞に辿り着いたのは、グローバル・クラスルーム北京から派遣されたスリランカの大使だった。

今回の議題のテーマは「平和維持活動(PKO)に派遣された国連職員の刑事責任」。一概に説明すると、1946年の条約により免責特権を委ねられた国連職員が罪を犯した場合、その職員を裁くのは誰か、そしてこの問題に対して国際社会はどう対応すべきかを問いた議題である。ここで自分たちの作戦及び会議行動を説明する。この議題は他とは違って対立軸がなく、全ての国が「犯罪者に妥当の罰を与える」という目標を掲げていて非常にユニーク。従って自分たちも本来なら考えもしない作戦を基に行動した。その作戦とはコンセンサスの確立だった。コンセンサスとは、会議に出席している大使の意見、主張を全て考慮しながら全員で作る一つの決議案である。成功するのが非常に難しいが、本物の会議で締結されている案は全てコンセンサスであることを踏まえると、正当性を有した作戦だと思ってもおかしくはない。議場の会議進行の手法は全日本大会とは大きく異なっていて、適応するのに時間がかかった。まず、Unmoderated Caucusに割かれる時間が全日

平均30分に対し今回は最大で20分と非常に少なく、逆に Moderated Caucus が比較的多い。そしてチェアパーソンは公式討議に重みを置いていて、非公式討議より各国のスピーチを優先することが多々あった。これらの要素が後に自分たちの作戦に大きな影響を与えることになる。コンセンサスを目指す自分たちにとって、他の大使との交友関係は必要不可欠。会議が始まる前に自分たちは会場付近に屯っていた大使たちに自分たちの名刺を渡し、コンセンサスについて事前に賛同を得るなど、積極的に交流。各大使はそれに反応したのか、会議が始まった時から自分たちは認識され、影響力を増すことができた。また、イタリア大使、ネパール大使、キプロス大使、そしてスリランカ大使が自分たち以外に最も影響力が強く、これら的大使と関係を深めることに努めた。スリランカ大使とイタリア大使とは、会議が始まる前に同盟を築くという幸運に恵まれていた反面、当初はコンセンサスにあまり賛同的ではなかったネパール大使の説得は最終セッションまでに及んだ。しかし殆ど大使がコンセンサス締結に同意してくれたのは嬉しいことである。コンセンサスにおいて重要なのは、対立している意見の解消。それこそ対立軸はないが、この議題に対しての解決策が多様なため、どうしても主張に差異が生じる可能性がある。今回の会議で一番論点になったのは、国連職員を裁く権利を持つ国・機関について。PKO ホスト国、職員派遣国、両国による協賛、ICC、ICJ などの既存の機関、そしてこれに特化した新機関による制裁など、主張は沢山あった。議論の末に、両国による制裁と既存の機関による制裁の二つに絞られたが、実を言うと ICC、ICJ は主に国際犯罪(戦争犯罪、殺戮、人道への犯罪など)を犯した人を裁く役割を担っており、国連職員による犯罪はこれらの機関の基盤になっているローマ宣言の下では裁けない。よって前者のソリューションが妥当なのだが、他の大使はこのことを知らず、間違いをなかなか自認しなかったのでこの論点の解消には時間がかかった。

結局コンセンサスは成立しなかった。まず、ネパール大使との主張の差異が最後まで続き、それが解消する前にアmendメント提出期限は過ぎてしまった。前述の会議進行も大きな要因だった。スピーチとモデで他の大使はコンセン

サスを意識せず言いたい放題だったため、コンセンサス確立において時間が無駄遣いされたと言っても過言ではない。本来だったら長いアンモデを取り、対立している主張をその間に解消するのが理想であるが今回はその時間がなかった。ほぼ全員の大使がコンセンサスに賛同的だったので、時間不足が一番の要因だったのではと思う。最後の投票行動では、4つの決議案が提出され、投票の結果、ネパール、キプロス、ジンバブエが出した案は可決、オマーンが出した案は否決された。

## 感想

悔いは残っている。最優秀賞を夢見て、自分たちはこの上ない努力をし、この上ない頑張りを買った。しかし、結局夢として残ったのは何とも空しい。でもその反面、人生に一度しかない体験をすることができ、僕は物凄く幸せでもある。家族、友人、引率の先生、パートナー、他の派遣生、グローバルクラスルームの大学生、ACCU とメリル・リンチの支えがあってからこそこれが可能になった。ここで感謝の意を述べたい。

派遣生の中で僕は模擬国連の経験が一番浅い。思えば去年の全日本大会は僕にとって人生初めての会議。ぶっつけ本番で挑んだ大会で、まさか最優秀賞を受賞するなんて思いもしなかった。あれからの半年を顧みると、あれだけ充実した生活を送ったことはないと感じた。模擬国連が学生時代のハイライトになるに違いないだろう。ここで渡米中にあった出来事について話したい。開会式前、国連本部の前で列に並んでいた時、僕は偶然隣にいたグルジアから来た学生と話した。「君はどこから来たの?」と聞かれ、僕は「日本から」と答えた。次に彼は「へー、日本のどこ?北京?」と聞いてきたのである。僕は笑いを堪えるのに必死だった。一見くだらなく、よくある会話であるが、翌々考えてみたらこういうやり取りは日本では絶対できないと思った。世界に出て初めて体験できることが無数にあり、特にニューヨークの模擬国連がいかにこれに満ちているかをよく表していると実感した。

最後になるが、今回の渡米は言うまでもなく、ずっと心に残るだろう。この5日間で世界中の学生と交流し、競い、そして友達になった。一



## Global Classrooms

一番痛感したこと、それは世界が広くもなく、狭くもなく、世界はすぐそこにあること。それを日本の学生に知ってもらいたい。中満さんが言ったように、受身の姿勢から脱出し、頑張っ手て手を伸ばせば世界と触れ合うことができる。僕はこの経験を糧にし、将来世界を舞台に活躍できるような人になる。



## 鶴原 幹

慶應義塾湘南藤沢高等部 3年

General Assembly 6th Committee - Legal  
"Criminal Accountability of United Nations  
Officials and Experts on Mission"

私が模擬国連を始めてからまだ一年経っていない。しかしその一年はそれ以上望めないほど充実したものだった。

私は11月に行われた全日本高校模擬国連大会に同級生の齊藤君とペアを組み、初めて出場した。我々は夏休み前に学校内に掲示されていたポスターに興味を惹かれて応募したもののまったく模擬国連の知識のない初心者だった。文化祭作業や部活との兼ね合いに苦しみ、国連特有の用語や複雑なプロシージャに頭を悩ませたが、グローバル・クラスルーム・ジャパンのバックグラウンド・ガイドやスタディー・プランは非常に参考になり、自信を持って大会に臨むことができた。

全日本大会は我々にとって初めての経験だったこともあり、初日は他校から来ている大使たちの堂々たる主張に圧倒されたものの、最終的には自分たちの決議案を可決に持ち込み、最優秀賞を受賞することができた。名前が呼び出されるまで思ってもみなかった受賞に、当初はあまり実感がわかず、嬉しさより驚きと「なぜ私たちが」という疑問の方が強かった。

最優秀賞を受賞した結果優秀賞の4校との計5校10名が2012年の5月にニューヨークで行われる米国国連協会主催の高校模擬国連国際大会(GCIMUN)に、日本代表団として派遣されることとなった。

12月になって日本代表団は「世界最悪の独裁国家」として有名なジンバブエを担当することが発表された。国割の不運を嘆いているひまもなく1月に各ペアからの希望を踏まえた上で担当会議が決まった。私たちはジンバブエ政府の本来のスタンスがあまり明確でなく、ある程度自由な主張が許される議題を希望し、国連総会第6委員会のPKOにおける国連職員とオブザーバーの刑事責任に関する議題を担当することに

## Global Classrooms

なった。その時から5月に向けた準備が始まった。予備知識の全くない議題であったため国連文書を読みあさり、ポジション・ペーパーやスピーチ原稿を書くことから、名刺作りやメモ用紙の作成まで準備に追われているうちにあっという間に渡航の日を迎えた。ただ模擬国連を始めてから日が浅く、全日本大会では何が評価されたのか、国際大会では何が評価されるのかが分からないままで、不安だった。

5月16日に私たち10人の派遣団と引率の方々にはニューヨークJFK空港に降り立った。

ニューヨークはすべてが新鮮で東京や以前住んでいたロンドンなどの都市とも違う活気と熱意にあふれた街だった。文化の多様性にも驚いたが、明確な階級間格差が残っていることにも少し衝撃を受けた。

2日目と3日目には国連日本政府代表部で公使の中前隆博さんと国連PKO局政策・評価・訓練上級部長の中満泉さんを訪問した。二人を訪問しお話を伺えたことは一週間の中でも大きな収穫だった。二人のお話は全てが印象的で感動的だったといっても過言ではない。お話を聞いて二人とも仕事に対する情熱とプロフェッショナルリズムに感銘を受けた。またお話の内容もさることながら、話し方から伝わる人格や能力の高さに強い印象を受けた。世界を股にかけて活躍される二人の訪問を通じて自分の憧れ、将来の目標となる人に出会えたと感じた。

3日目の午後からついに大会が始まった。開会式では世界25ヶ国から集まった高校生2500人が期待と興奮に胸を膨らませて国連総会会議場を満たしていた。潘基文国連事務総長が開会の挨拶を述べに来場し、私も待ち望んでいた本番を目の前に心を高ぶらせていた。普段各国の首脳が座り、世界的問題を議論する席で国連事務総長の話聞いたことは一生の思い出になるだろう。

会議自体は4日目と5日目の金・土曜日の二日間にわたって行われた。今回の議題は少し特殊で国家間・地域間の争いではなく国連内部の問題であり、さらに総会である以上全会一致の決議が望ましい。そのため私たちは全会一致の決議を作ることを第一目標としたがそれを共通意

識として大使全員が持てず初日に数多くの小さなグループに分裂してしまった。全会一致のために必須なある程度の妥協を拒む大使が多く、また実現性や現状を無視した理想論を展開する大使もいたため、全員を「全会一致」の目標に向かわせることができなかった。そのため2日目に決議案のコンバイン(統合)による全会一致の決議を作ることができない場合に備えて我々は独自の決議案を作成、グループとして提出した。

最終的に全会一致の決議はできなかった。2日目になり、グループ間の協力なしでは全部の決議案が否決されてしまう状況になって初めて、他のグループのリーダーたちと真剣に決議案のコンバインを交渉し始めることができた。しかし後少して完全な合意が取れるというところで議長が交渉時間を打ち切ってしまうコンバインはできなかった。結局コンバイン交渉に関わった全部の決議案を通すこととし、元々支持が少なかった一つを除く4本中3本の決議案が可決され、正式な決議となった。しかしグループ内で投票行動に対する統制がしっかりとれていないグループもあり、私たちの決議案の時は賛成と反対が拮抗し、集計が行われている間はものすごく不安だった。しかし最後に議長が木槌を鳴らし、4票差という僅差ながら可決されたことを宣言された時の喜びは忘れられない。

二日間の会議の結果、優秀賞(Honorable Mention)を受賞した。その会議における最優秀賞(Best Delegate)が取れなかったのは残念で悔しかったが、目指していた全会一致が達成できなかったほうが悔しかった。全日本大会でもコンバイン交渉で失敗していたため今度こそ成功させたかったのである。

ただ最終的に最優秀賞を受賞した中国から来たスリランカ大使はじめアメリカ、レバノン、インドなど世界中のすぐれた高校生たちと議論し、交渉し、友達になる過程は大変刺激的な経験だった。最初は対立しあっていた他グループの大使たちも最後決議案のコンバインを目指す中で仲間意識が生まれ、皆が賞を取れたことを祝いあい、別れを惜しむようになった。将来各国を引っ張っていくであろう人達と出会えたことは非常に価値のある体験になった。この忘れ



## Global Classrooms

がたい経験と友人をこれからも大切に、将来国際社会における幸福の増進になにか貢献出来ればという意欲を新たにしたい機会であった。

最後にグローバル・クラスルーム・ジャパン、ユネスコ・アジア文化センター、引率教員の方々及び支援して下さったすべての方々にお礼申し上げます。皆様の援助のおかげでまことに貴重な経験を得ることができました。特に最初から最後まで支えてくれたルサレビアン先生とペアの齋藤くんには感謝してもしきれません。

また派遣団6期の全員に出会えて本当に良かったと思います。今年日本代表団としては史上最多の4つのアワードを取れたことを本当に誇りに思っています。今後も日本の高校生がこの素晴らしい事業に参加し続け、我々が受けた刺激と感動をより多くの高校生が体験できることを望みます。

来年こそは Best Delegate を!



## 齋藤 優香子

実践女子学園高等学校 2年

2012年5月15日、私は不安と期待を募らせながら成田空港に到着した。集合場所で派遣生の姿を目にしたとき、全日本大会が終わり全米大会に派遣されると知ったあの瞬間からもう半年たったのだと改めて実感した。半年間あったたくさんの葛藤、出会い、助言、くやしき、時間などを決して無駄にしないようにやれるだけのことをやり、会議を楽しもうと心に決め、ジョンエフケネディー空港までの13時間の飛行機の移動時間が始まった。

時差ボケになったもの・ならなかったもの、気分が悪くなったものなど様々だったがとりあえずみな無事にニューヨークに到着することができた。空港からバスで一時間かけ、ようやく私たちの宿泊するホテルのグランドハイヤットに着いた。それからチェックインの関係で3時間ほど自由時間をいただくことができ、皆、ショッピングなどして時間を有効的に使用することができた。その際に、私と数名は国連本部にお土産を買うために足を運んだ。初めての国連本部の姿に圧倒され、3日後にここで開会式が行われるのだということが信じられなかった。ホテルに帰り（私と相方は二人部屋だった）私と相方は疲れていたのかすぐに眠りにはいった。こうして私のニューヨークでの1週間は幕をあげた。

二日目は日本代表部に訪問し、中前隆博様のお話を伺った。PKOの話、業界の裏話、今の日本についてまた私たちの書いたポジションペーパーに目を通していただくことができそれに対するご意見をくださった。質問も丁寧にかつ分かりやすくご説明して下さった。大変ユーモアがある方でお話を伺っているのは純粹に楽しかった。午後は現地校の子と博物館に行き、模擬国連の話や日本の話などで盛り上がった。

三日目、国連平和維持活動局の政策部長をやっておられる中満泉様にお話を伺った。PKOで実際に行っている活動を体験談を交えながら話しして下さった。ただでさえ日本人女性の国連の職員が少ないのにもかかわらず中満様の

## Global Classrooms

お話を伺うことができ大変勉強になった。午後は初日に行った国連本部にて開会式が行われ、潘基文のスピーチなどが始まり、終始テレビをみているような不思議な感覚に陥った。明日から会議だ。それが寝るまで頭の中をぐるぐるしていた。

四日目、ついに夢にまでみた模擬国連の全米大会が始まった。私たちはジンバブエ大使として、IAEAの会議に参加し、議題は放射能の影響についてだった。会議が開催される部屋に行き、ジンバブエ大使の席につき、まわりをみわたした。たくさんの国からきている高校生を目の当たりにして私たちは「やっとこの場所にたつことができた」と長年の夢がかなったのだと実感した。会議が始まった。噂には聞いていたが話し合う必要もない公式討議が何個もおこなわれ、非公式討議を何回あげても議長に却下されてしまうという全日ではありえない会議進行であった。全米ではこれが普通なのかと思い、ジンバブエが関係ない公式討議ばかりで私たちはただただ茫然と座っていることしかできなかった。お昼の時間になり、引率していた大学生の先輩にきついアドバイスをいただいた。会議進行がおかしいことを指摘しないこと、私たちのスピーチを読むのが早いこと、チャンスの使い方が下手であることの指摘をしていただいた。この三点の解決方法をお昼の時間に考え、午後からは議長の会議進行がおかしい場合はどんどん指摘をし、自分らで解決できるところはなんとかしてなおすことで固まった。午後の会議は始まり、議長がかわり会議進行をお昼の時間に見直したのか、午前よりも多く非公式討議の動議を採用するようになった。それを期に私たちは自分らのグループを作成しようとしたが、他のグループにのまれてしまった。私たちは、そこから離れもっと自分たちと意見があうグループに属そうとしが、私たちの選んだグループは意見をたくさんいい、英語が達者な方しかいなかった。そして上層部だけが話し、ちょっと意見を言おうとすると完全に無視されるという状況になっていた。自分たちの意見を無視されるようであるならばこのグループに入る意味はないと思い、私たちは再び新しいグループを形成することを試みた。スポンサーは6か国という他のグループよりも多く集めることができ、そのグループの主導権を握ることができた。シ

グナトリーを集め、各国の国益をいれつつ、私たちの用意した政策を一番に掲げるワーキングペーパーを提出することができ、ここでこの日の会議は終了。終了後すぐに大学生の先輩から明日の会議終了後の集合場所等の話が少しあり、派遣生は各自の部屋で明日の会議の準備をした。私たちも会議戦略を立て直し、夜中の2時くらいまで大学生の先輩方と会議の行動の仕方、非公式討議、公式討議のあげるタイミング、公式討議で何を発言するか、どこでコンバインするか、など細かいところまで話し合った。

五日目、会議二日目。私たちは昨日大学生の先輩方と話あった会議進行の紙を会議が始まる前に議長に提出し、それ通りに動いた場合の利益を説明した。その効果なのか運が良いことにその紙通りに会議が進行した（不思議なことにまた議長が代わっていた）。非公式討議では私たちは形成したグループとワーキングペーパーを見直し、もっと具体的にしようという提案をした。また、他のグループとの交渉をどんどん行いひとつの大きいグループと協力することに成功した。公式討議では、私たちがあげた、各自のグループが何を今話し合っているのかという討議が採用された。会議の流れは私たちとしてはよい方向に向かったが、レゾリューションの提出時間の関係で私たちは協力したグループと一緒に直せばいいと思っていた。お昼になり、大学生の先輩と今後の行動について再度確認。また、わからないことは議長に何回も聞きに行った。そこでアmendやコンバインの時間が確保できないので今回はそれができないことなどを初めて知ることができた。お昼の時間はあつという間に終わった。泣いても笑ってもあと数時間で高校生として参加する最後の会議。とりあえず楽しもうと午後の会議に挑んだ。会議が行われている部屋に入るとなぜかまた議長が変わっていた。それぞれのレゾリューションの説明を行って、すこし非公式抗議が行われ、質疑応答がおこなわれた。しかし、レゾリューションが全員分ないという問題が発生していたら、時間がなくなってしまい、質疑応答を早く終わらせろといわんばかりの本当は5分あるところを2分に削られてしまった。あつという間に投票に移った。残念ながら私たちのレゾリューションはおしくも可決されず、8個のレゾ



## Global Classrooms

リューションのうち 2 個しか可決されなかった。そして賞の発表が始まった。私たちは自分たちのベストが尽くせたことがうれしかったし、この会議に悔いはないと言い切って会議を終了できたことに満足していた。結果として、賞を受賞することは叶わなかったが会議で存分に力を発揮することができた。敗因を上げるのならば議長との中がこじれてしまったことが一番であり、もう一つは自分らの性に合わないグループに属してしまったことではないかと思う。一番初めの、意見を無視されるグループに入り、そこで自分たちも意見を聞いてもらえるように頑張っていれば違う結果が私たちを待っていたのではないかと思う。

この 8 か月間ずっと模擬国連の活動をする事ができ、学んだことが多い。悔しい・うれしいと思う感情も充実感も努力もなにもかも今までとは少し違い、模擬国連に参加していなければこの気持ちを味わうことができなかつた。8 か月振り返ってみると様々なドラマが繰り広げられ、それらも今となってはいい思い出であり、この経験は一生忘れることができない。模擬国連に誘ってくれた相手、全日前からいつも私たちの活動を見守りときにアドバイスを下さった先生方、私たちの政策や会議の行動を最後まで見守って下さった先輩、家族、引率の先生方、模擬国連にかかわったすべての方に感謝をするとともに、この経験が無駄にしないように次の目標にむかって日々精進していきたい。



## 坂井 まな

実践女子学園高等学校 2 年

今回私たちは国際原子力委員会 (IAEA) の、放射能の影響 (Effects of Atomic Radiation) に関する、参加国数が 130 を超える会議に参加した。私たちは、原発事故などにより汚染された食べ物などが ODA や人道支援として途上国に送られることがある、という事実について問題視しており、この問題の解決を求めるということを主張した。結果として、受賞することは叶わなかったが、自分たちの会議中の行動には後悔はしていない。本報告書では、初日と二日目、それぞれ前半後半に分け、会議の様子と自分たちの行動をそれぞれに記した上で、この会議での反省点を述べたいと思う。

## ・初日前半

会議開始後、まずスピーチ希望国の募集が行われた。私たちは約 10 番目のスピーカーズリストに掲載することができた。その後、40 分の Unmoderated Caucus を求める動議を上げたが、長すぎるという理由で議長裁量により却下された。その後も、IAEA 職員の教育について、原子力のありかたについて、トリウムについてなどの Moderated Caucus が出されたが、そのほとんどが投票で却下され、スピーチに回り、また Moderated caucus に戻る、ということの繰り返しだった。その後、やっと 15 分のアンモデが許可され、私たちは事前に調べていった、今回の議題があまり関係のない、アフリカ諸国やオセアニア諸国などに声をかけ、話を聞いたが、グルーピングがうまくいかず、結果、ノルウェーやスペインが中心となっているグループに入った。このグループでは、原子力発電の段階的廃止を目指し、再生可能エネルギーなどの技術を途上国に提供する、という話し合いが行われていた。私たちもこの案には賛成で、さらに私たちが用意した主張を他のメンバーにした。しかしながら、このグループの大きな特徴だったと思うが、大きなグループだったため、数カ国のみ話し合い、意見によって文言が書かれており、そのほかの案はほぼ切り捨てられていた。私たちの案も他と同じように文言には書かれてはおらず、また時間の関係でスピーチをするのが前半最後となってしまい、不安の残るまま前半は終了した。

## Global Classrooms

## ・初日後半

会議の様子として変わったことが一つある。議長の進行について疑問を感じた G C J の方が注意を促して下さったため、議長が Unmoderated Caucus の数を増やし、Moderated Caucus の数を減らすようになった、という点である。また、昼食時にパートナーと話し合った結果、自分たちの意見を反映してもらうことのできない今のグループにいるより、他の国を集めて違うグループを作る方が効果的であると判断し、そのグループを抜け、あまり会議について詳しくなく、どう行動してよいか分かりかねている国の大使に声をかけ、会議の説明と交渉を行い、新たなグループ形成に成功した。その後も、そのグループで順調に話し合いを進め、最終的に Working Paper をフロントに提出することができ、初日の会議は終了した。

## ・二日目前半

開始 30 分後程して、前日に提出していた Working Paper が添削され、返却された。私たちのものは、内容に関する大きな変更点は少なく、文法や書式ミスに関しては同じグループの大使に手伝ってもらいながら修正した。この時点でスポンサーが 5 カ国ほど、シグナトリーが 18 カ国ほどだった。賛成票を増やすため、この後私たちは Moderated Caucus のほとんどを、あらかじめ大きなスケッチブックに私たちの DR(draft resolution) に書いてある事柄を記してゆき、図などを使いながら他の大使に説明して回る時間に費やした。その結果、スポンサーとシグナトリーも増やすことができた。その前後のモデでは、各グループが DR に書いていることに関してや、限定されたテーマについてなどを話し合う時間に使われていた。その中で我々も自分たちのグループ内で話し合われている事柄について述べるなど、Moderated Caucus でなるべく発言するようにした。又、この時間に自分たちの DR を書き上げ、フロントに提出した。その後の Unmoderated Caucus では他グループとの交渉も始めた。大きなグループで私たちの DR に賛成してくれるところも多く、投票時に互いの DR に賛成票を挙げることを約束するなどした。このように、二日目前半は主導権を握ることもでき、順調に終了した。

## ・二日目後半

二日目後半では、時間の関係で、本来あるべき修正案の提出は認められず、Moderated Caucus と Unmoderated Caucus が少しあったあとすぐに投票行動にかけられた。この時点で、私たちが把握していた限りで、全グループの共通目標として、'原子力の平和的な安全利用' というのがあり、その中で、原発の廃止を求めるグループ、規制を設けることを主張するグループ、また、原発を推進するグループに分かれていた。私たちは中間意見である規制を主張するグループであり、その立場から、共通目標である'原子力の安全性'は全会一致を目指す必要があること、それぞれのグループに妥協点が存在することなどを Moderated Caucus で主張し、Unmoderated Caucus では引き続き投票に関する交渉を行った。結果として、8 つの DR が提出され、そして投票行動に移された。投票の結果、二つの DR が可決され、その他は否決となった。私たちの提出したものは後者にあたり、これで二日間にわたる会議は終了した。

## ・反省

全体的な会議の感想として、先にも述べたとおり、出だしは挫いたものの、その後の自分たちの行動には満足している。にもかかわらず、受賞に至らなかったことの原因は、パートナーとも幾度にもわたり、話し合った。その結果、主に 3 点、敗因と思われる事柄が出てきた。まず、一つ目として、私たちは楽な選択肢を選んではなかったのではないかと、ということだ。私たちは初日後半で入っていたグループから抜け、新たなグループ作成を目指すことを選んだ。しかしこれは、必要に迫られての選択ではなく、自分たちが元のグループで交渉し続ける自信がなかったためであり、結果として順調に DR 提出にまで至ったものの、小さなグループのまま会議が終了してしまった。ここから、私たちが新しいグループ形成ではなく、多少の困難はあったであろうが、元いた大きなグループ内で交渉し続けているべきだったのではないかと考える。二つ目は、DR の内容がかなり薄いものだったことである。私たちの DR における投票では、棄権する大使が多かった。その原因はここにあると考え、より具体的な案を提出し、多くの賛成票を得ていけば、あるいは結果は変わっていたのではないかと考える。三つ目は、



## Global Classrooms

議長との不仲である。今回私たちの会議を担当して下さった議長は、平和主義的なところがあり、DR に関する質疑応答も厳しい質問に関しては議長裁量で却下するほどであった。ここから分かる通り、我々は穏やかに会議を進めるべきだったが、私たちはそれを見誤り、会議中も気になることがあればすぐにメモでフロントを指摘するような事を書いていた。そのため、途中議長が何度も変わる、というような混乱を招いてしまい、悪印象を与えてしまったと考える。以上の3点が、私とパートナーが考えた敗因である。

ここまで、会議の流れと反省点について述べてきたが、結論として、私たちは高校二年にしてこのような体験をできたことに深く感謝しており、悔しい思いもあったものの、今回の事は非常に良い経験になったと思っている。また、会議開始前の数日間、日本政府の方や国連職員の方のお話も聞くことができ、非常に勉強になり、また大変貴重な時間を過ごさせていただくことができた。今回の派遣事業にかかわる全ての方、派遣前、派遣中に支えて下さった方々に心から感謝したい。



## 関根 雪菜

渋谷教育学園幕張高等学校 3年

### ● はじめに

「バングラデシュ大使、おめでとうございます」拍手。皆の視線が一斉に私とパートナー（林由季）に向けられた。全日大会の二日目。会議が終わって選考発表のときだった。

二度目の全日本大会挑戦であり、ニューヨーク行きの切符を手に入れたというのに私はその時何故か複雑な気持ちであった。私たちは確かに具体的かつクリエイティブで理想的な決議案を提出することに成功し、議長に評価されたように、相手国と自国との共通点を探って交渉も自分たちなりに頑張ったと思う。しかし、何故か心から喜ぶことができなかった。これで満足して良いのだろうか。何か物足りない。やり残したような気がしてならなかった。

一ヶ月後の冬休みに、自分が納得できなかった理由が分かった。たまたまグローバル・クルスルーム日本委員会の公式サイトを見ていたところ、次のようなことが書いてあった。

模擬国連の目的は大きく分けて二つある：

- ① 国際連合及び国際関係に関する研究と国際問題の正確な理解又その解決策の探求を促進すること
- ② 豊かな国際感覚と社会性を有し未来の国際社会に指導的立場から大いに貢献できる人材を育成し輩出すること

「正確な理解」という言葉が目についた。そしてその瞬間気付いた。全日大会の時、私は立派な解決策を創ることに夢中で、議題や担当国の背景を正確に理解したとはいえなかったのだ。もちろんリサーチは十分したつもりであったが、議題に関するバングラデシュの国益などのような、インターネットや本で探しても見つからないようなことは全て自分たちで推測しただけであった。調べても見つからない情報なのでしょうがないかもしれないが、それでもこのような根本的な部分を追及せずに済ませてしまったことが許し難かった。

全米大会では、ジンバブエ大使として「武器

## Global Classrooms

貿易条約」を議題にした国連総会第一委員会に参加することになった。全日大会の教訓を踏まえて、今度は真にジンバブエの代表になりきり、本質的な解決策を創ることを個人的な目標とした。

### ● 事前リサーチ

調査は春休みに入ってから本格化した。

それまでにインターネットや本で調べ、高校の地理の先生にも質問しながらリサーチを進めていたが、それは全日大会と同じレベルにすぎなかった。つまり、第三者の立場から書かれた資料ばかりだったので、「世界最悪の独裁国家」と世界から批判されているジンバブエの国益がまだ明確でなかった。また、インターネットで見つけた信頼できそうなサイトは専門用語が多すぎて理解に困ることが多かったし、逆に学校の先生に武器貿易の専門家がいるわけでもなかった。武器貿易に関する知識もまだ浅いと感じていた。そんな私と林は自ら行動を起こし、理解を深める絶好の機会を二回手に入れた。

一つ目は、ジンバブエ大使館訪問。前々に電話で日時を予約し、さらに質問も事前にメールしたのでかなり掘り下げた話を聞くことができた。また、IMF 会議「External Debt Sustainability and Development」に参加する栄光学園の青木達也と国連総会六委員会会議「Criminal Accountability of United Nations Officials and Experts on Mission」に参加する慶応義塾 SFC 高校の鶴原幹の派遣生を誘ったので、担当議題だけでなく、別の問題からジンバブエを見つめることができた。しかし、なによりも心を動かされたのは相手をしてくれた一等書記官のダイヤモンド・ジョア氏と参事官のタオナ・ハバディ氏が母国の悲劇的な歴史や現状について語り出した時だった。

「世界はジンバブエを誤解しているのだよ。西洋のメディアは母国で事件が起きた時しか報道しないからね。ほら、ジンバブエはアフリカで最も識字率が高い国であることやダイヤモンドを産出する豊かな美しい国だってことは誰も知らないでしょう」「でもね、我々は信じているよ。いつか真実が打ち勝つことを。世界の人々は我々の本当の姿を知る日がいつかくることを心から信じている。世界の人々の目はふし

穴ではないはずさ」

ジョワ氏は声に情熱を込めて語り、ハバディ氏は黙って悲しそうに微笑んでいた。

二時間に及ぶ取材を終えて大使館を後にした私はジンバブエの大使館員にすっかり感情移入していた。

二つ目は、NGO オックスファム・ジャパンのポリシーオフィサー夏木碧さんによる武器貿易条約の研究会である。ジンバブエは武器貿易条約に反対しているが、それに対して NGO はジンバブエのような人道的侵害を犯す国を強く批判し断固たる武器貿易条約推進派なのだ。NGO は客観的に国際問題を分析する方法を持っているので議題をより巨視的な立場で理解することにおいてとても参考になった。また、夏木さんは国連総会の武器貿易条約会議に実際に参加した経験があるので、発表を聞いていて現実味が湧いてきた。様々な人との交流を通じて、何とか武器貿易条約会議の正式書類を手に入れることができたのがすごく役に立った。そうして私たちは、会議当日の行動戦略を立てられる段階にまでなったのだ。

### ● 会議前日まで

行動戦略をたてるのに相当苦勞し時間を費やした。他の大使たちがどのくらい事前調査をしているのか分からないのが大きな難点だった。例え国連の書類にある国の主張が正式に書かれてあっても、必ずしも本会議の参加者たちが同じスタンスを取るとは限らないし、それは当日になってからではないと分からないことだった。そのため、私たちは幾つものシナリオを想像し、どんなシナリオになってもまた予想外なことが起きて柔軟に対応できるように細かく計画を立て役割分担をした。実際、会議前日に同様アフリカ国のセネガル大使と偶然出会い事前交渉した結果、急遽予定を大幅に変更することになったが、元々臨機応変に対応する心構えがあったからこそ会議当日の早朝に計画を立て直しても落ち着いて対応でき、上手くいったのではないかと思う。

### ● 会議当日

予想通り、他国の大使たちの本議題に対する取り組み方は様々である。事前準備をしていな



## Global Classrooms

い国もあれば、具体策を積極的に押し出して注目を浴びる大使もいる。

林がジンバブエ同様、武器貿易条約に消極的な国の大使を集めてグループを固める間、私は会議全体、各国の動きを見ながらシグナトリー集めと合併交渉に励んだ。一五〇組約三百人の大使がそれぞれの目的を遂げるべく動くので、非公式会議中はカオス状態だが、だんだん動きが見えてくると、しっかり事前準備を元に行動している大使の周りにリサーチ不足の国が集まっているのが分かった。私はそれらの自国の主張が固まっていない国を勧誘することに成功した。

たまに、鋭いつっこみを言う大使もいた。「ジンバブエ大使、あなたのグループの案が抽象的すぎて理解できない。私の解釈だと、この案は拘束力もないし武器貿易条約を結ぶ意味がなくなる。もうちょっと具体的に案を説明してほしい」と中央アフリカ共和国大使に言われた。ジンバブエとしては、中央アフリカ共和国大使の言う通り拘束力のない条約を提案していた。しかし、その時「その通りである。武器貿易条約推進派のあなたと立場は違う」と言ってしまうと、シグナトリーの数が減り、足りなくなる恐れもあり得た。そこで、私は事前に林と考えた、もしこのような突っこみを言われた場合に準備しておいた返答で答えた。

合併については、ベネズエラとの交渉が予想外に上手く進み、彼女らの所属するラテンアメリカのグループとの合併が成立した。最終的に、投票行動で多くの賛同を得て私たちの提案案が通り、会議が終了した。

## ● 総括

会議は全体的に私たちに有利に運んだ。本会議で一番意識したことは、相手国がどのような立場にあるか、武器貿易条約をどう解釈しているかを見極めることである。リサーチ不足の国はすぐに誘導されてしまう。全米大会では素晴らしいスピーチがたくさんあった。巧みな話術に即座に対応できるかどうか不安であった。しかし今回は、事前の調査がものを言った。武器貿易条約の争点がよく理解できたので、各国の立場も分かり、すきをつくことができ、また共通点を挙げて仲間を増やすこともできた。ど

んなに鋭い質問にも圧倒されずに対応できたのは、準備に時間をかけたことが、自信になっていたからだと思う。

この渡米報告書を、敢えて渡米前のことから始めたのは、後に続く後輩たちに事前調査の重要性を伝えたかったからである。思えば、全日本大会での反省を生かそうとジンバブエ大使館を訪ね、その国の人々に思いを馳せたことが、この模擬国連での活動の出発点だった。交渉に勝ったり、主張を通したりすること以外に、様々な国の事情を理解すること、あるいは理解するための想像力を養うことも模擬国連の一つの意義であることを実感した。

この度は、高校模擬国連国際大会への参加にあたり、多くの方々のご協力をいただきました。第五回全日本模擬国連大会では優秀賞を得て、又、全米大会では Honorable Mention を得ることができたことをはじめ、大変充実した経験をすることができました。ご支援いただきました方々に改めて感謝の意を表したいと思います。



## Global Classrooms

## 林 由季

渋谷教育学園幕張高等学校 3年

この度はこのような貴重な経験を可能にしてください。くださった JCGC、ACCU、協賛企業の皆さま、渡部さんをはじめとする研究の皆さま、柴原先輩などアドバイザーの皆さま、各校引率の先生方、応援してくださった皆様、本当にありがとうございました。感謝の意を表して以下に報告を書かせていただきます。

## 概要

2010年の第4回全日本模擬国連大会で Democratic People's Republic of Korea(北朝鮮)を担当。

2011年の第5回全日本模擬国連大会で Bangladesh 大使として優秀賞を受賞。

第6期派遣生として 2012年国際模擬国連大会に出場、

Zimbabwe 大使として Honorable Mention(優秀賞)を受賞。

## 議題「武器貿易条約(ATT)に向けて」。

武器貿易条約とは、通常兵器の輸出入及び移譲に関する国際的な共通基準を設けることによって、通常兵器の不法な流通の規制を目指す条約である。現実ではまだこの条約は締結されておらず、本会議は 2012年7月に開催予定の ATT 締結会議を模擬したものであった。2012年5月現在で ATT に反対している国は世界で Zimbabwe のみという厳しい状況のなか、行動戦略を練り、会議に挑むことになった。会議前日に柴原先輩に「5組の派遣生の中で最も厳しい立場だ」と言われ、その通りだと感じたのを覚えている。

## 会議前

私はリサーチが苦手である。興味があることはほとんど調べるのだが、興味がないことについては全く手がつかない。今回もまた武器貿易に興味を持ち出すのに時間はかかってしまったが、いざ始めると5キロ分以上のリサーチをこなすことができた。また、今回は「武器と市民社会」研究会第29回会合(報告テーマ: ATT: 2月準備委員会報告と7月交渉会議のシナリオ/報告者: 夏木碧(オックスファム・ジャパン))に参加するなど、ATTに関する生の声

を聞くことができ、参考になった。更に会議直前の政府代表訪問でも「国益を守る」という立場から非常に貴重な話をうかがうことができた。

しかし、会議前の時間を総じて最も充実していたのがパートナーとの話し合いの時間である。サポートペーパーやポジションペーパー、IS、ワーキングペーパーの作成を通じ、パートナーと話し合ったことすべてがこの結果に結びついたと思う。3年前から二人で模擬国連をやってきてなんとなく「コツ」は掴んできたが、唯一上達したと断言できるのが二人での話し合いなのである。「この会議におけるジンバブエの国益はなにか。ボトムラインはなにか。会議の流れはどう予想されるか。行動戦略はどうするか」。このようなテーマを幾度となく繰り返し話し合い、結局納得のいく答えは会議前日(当日の早朝)にようやく出たくらいだった。

最後に一つ重要な補足をしたい。国際大会では全日本大会と異なり、開会式から交渉が始められる。私たちも開会式でセネガル大使と交渉し、衝撃的な経験をした。交渉は「Are you for or against the ATT?」で始まり、まさに白か黒か問うようなものだった。日本では割と aggressive だった自分も発言する間がないくらいマシーンガントークをされ、久しぶりに自分が日本人であることを感じた。それはさておき、大事なものは交渉内容だ。それまで私たちは Plan B としてアフリカ諸国と協力しようと考えていた。しかし、アフリカ大陸に所属するセネガルは私たちの考えとは相反する計画を立てていた。これを受け私たちは急遽作戦を変更し、アフリカ諸国との協力を断念し、ATT 締結に対し消極的な姿勢をとっていた 20 か国を中心に拘束力のない、弱い ATT をつくる Plan A に専念することにした。会議ではそれに成功した。

## 会議初日

まず事前に作成しておいた 19 枚のメモを各国に届けた。結果、最初の Un-moderated Caucus で私はおよそ 10 カ国と意見交換をし、まとめることができた。日本の会議の場合最初の Un-moderated Caucus でグループが結成されても崩れてしまうケースがほとんどだったが、今回はここで集まったメンバーとは投票行動まですぐと協力関係を築くことができた。私は集



## Global Classrooms

まってくれた大使たちと早い段階から決議案(Working Paper)を作成し始め、すぐに完成させることができた。しかし今回は大きな会議であったため、Sponsor と Signatory が最低でも計 23 か国必要だった。よって Working Paper を作成中、関根が会場を回り Signatory を私たちのグループの陣地に呼び寄せるといった形で Signatory は十分集めることができた。

ここで一つ気をつけたことがあった。今まで模擬国連をやってきて、「良いリーダー」と「悪いリーダー」を見てきた。悪いリーダーとは、決議案の提出者になることに熱中するあまり一部の大使の意見しか聞かず、多くの意見を無視してしまうリーダーである。私はこのような大使にならないことを、日本でもアメリカでも目標としていた。したがって、この会議でもグループが拡大してもなるべく自分のグループに所属する大使全員の意見を反映した Working Paper をつくり、どのグループよりも強い一体感を作ろうと心掛けた。これが翌日のある出来事に結びついたと思う。

こうして午後 Working Paper を提出した後は、グループで今後の行動の話し合いをし、ラテンアメリカのグループと交渉をはじめたところで、会議初日は終了した。部屋に戻ってからは二人でひたすらスピーチや行動戦略など翌日の準備に励んだ。

**会議二日目**

運の良いことにジンバブエは序盤にスピーチをすることができ、計画通り Moderated Caucus を呼びかけることができた。予想外だったのは、前日に Working Paper が 10 個提出されており、議長がどこどこがコンバインするべきか提案してきたことだった。しかし、この提案にはあまりに納得がいかないので自分たちの予定を優先し、私はラテンアメリカとの交渉に向かった。その間、関根はグループのメンバーと賛成票集めをした。これの方法としては前日の夜に二人で話し合い、賛成票をくれた国の名前を貼るポスターを作成した。これには賛成票を集めることだけでなく、グループの団結力を強化する意図も含まれていた。

ラテンアメリカとの交渉は順調に進んだ。前

日に食い違っていた一点についても妥協点を見つけることができた。そして次に全大使が着席すると、突然議長がコソコソと「グループをまとめてそうな 5 国」に決議を書く正式な黄色い紙を配布し始めた。そこで私たちは次のように指示を受けた。

「議長から見て、キミたちはよく頑張ってくれている。だから時間の関係上お願いがある。ジンバブエ大使の二人のうち一人と、コンバイン相手(ラテンアメリカ)の代表者一人で、後ろで決議を書きに行ってくれないか。混乱を避けるためにその二人以外は絶対に関与しないでくれ。」と。

正直、驚いた。コンバインって全当事国が携わらなくて良いんですか、と思った。しかし確かに会議終了まで 1 時間を切っていて相当時間はなかったことも否定できない。こうして私とキューバ大使二人は、他の大使が Moderated Caucus で着席している中、後ろでひたすらコンバインした決議案を作成した。この時本当に時間に追われていたが、私たちのグループの譲れない点はすべて盛り込み、ジンバブエの国益を守るような決議案を作成することができた。

この時点で一つ嬉しい出来事があった。議場では「Hate Letter」という批判のメモを受け取っている国もいた中、グループのメンバーからジンバブエ宛てに「Good job!」というメモが回ってきたときには、最高に嬉しく、「良いリーダー」に近づけた気がした。

このようにして決議案を提出し、ジンバブエは実質決議案提出国となり、決議案提出のスピーチや質疑応答をする権利を得た。そしていよいよ投票を迎えると、決議案は 5 つ提出されていた。私たちの決議案 1.3 は Clear Majority で可決され、無事会議を終えることができた。

**Overall**

最後に、箇条書きでいくつかのポイントを挙げたい。

- ・議長と良好な関係を築くことは本当に大事
- ・日本より議論のレベルは低い、中には物凄い大使もいる
- ・全体的にスピーチ能力は全日本大会と比べ物にならないくらい高い

## Global Classrooms

- ・みんな Moderated Caucus に対して積極的である
- ・決議案に賛成していなくても「この決議案を議論にあげたい」と思ったら Signatory になることができる
- ・国益を守ろうという姿勢が見られない
- ・議長の立場になって考えるべき
- ・時間が予想以上でない
- ・会議は開会式から始まっている
- ・臨機応変に対応できるようにするためにリサーチが重要
- ・Working Paper や決議案の提出国はほとんど受賞している
- ・日本でできないことはアメリカでもできない。日本でできることはアメリカでもできる。
- ・英語が完全に流暢な人はそこまでいない。
- ・交渉においては、聞くことが一番大事
- ・ペアワークが重要。役割分担できると良い

私たちは会議初日が順調だった分、二日目の前半は混乱してもう駄目かもしれないと思ったこともあった。精神的・体力的にギリギリの状態でも決議案が可決されたことを喜んでいううちに表彰式が始まった。Honorable Mention にジンバブエが呼ばれたときは本当に驚き、もの凄く嬉しかった。波乱が満載だったが、3 年間パートナーと共に模擬国連を続けてきて良かったと心から思った。本当に模擬国連人生最高の締めくくりである。模擬国連で学んだことを今後の自分の成長の糧にし、よりよい世の中を築けるように働きかけていきたい。

力を貸してくださった皆様本当にありがとうございました。

**古賀 祐海**

聖心女子学院高等科 3 年

国際大会を終えて帰国し、私はいま半年間つきあった模擬国連に別れを告げて元の生活に戻ろうとしている。この半年を振り返ってみると、やはり最後の国際大会で得たものは大きかった。会議に関して言えば、失敗の方が成功より多かったが、そこから学んだ事について書きたいと思う。

私達二人の担当会議は地球サミットで、初日は 5 つの地域に分かれての会議になった。ジンバブエ大使である私達は、アフリカ地域の約 50 か国から成る小規模な会議を経験した。小規模会議の難しいところは、1 日でアフリカのコンセンサスとしての決議案を提出しなければならないということだ。小さい会議だから意見は自然とまとまるのではと思われるかもしれないが、決してそうではない。実際、決議案作成はトラブル続きだった。当初 3 つのワーキングペーパーが作成され、私達はそのうちの 1 つに自分たちの主張を入れることに専念した。それぞれのワーキングペーパーはかなり異なっているように思えたが、会議全体の雰囲気として早く 1 つのペーパーにまとめようとしていたようで、十分な議論無しにコンバイン作業に入ってしまった。コンバインと言いつつも、時間が足りなかった事もあり、3 つのうちで最も短かったペーパーが選ばれ、それをアフリカの決議案とすることになった。結果として、私達の主張が入ったペーパーは 1 日目の決議案に全く反映されなかった。

1 日目を終えて振り返ったところ、私達に足りなかったのは英語力ではなく、他の大使を味方に付けるための作戦だったと気づいた。アフリカ会議にはアメリカの高校生だけでなく、英語が流暢でない海外からの生徒もたくさんいた。私達は英語力が足りない議論においていかれるのではないかと心配して、どこか気後れしていた部分があった。しかしそんなことはなく、英語が流暢でなくても発言機会をうまく使って皆を味方につけ、リーダー的な存在になった大使もいた。私達は積極的に発言することはできたが、多くの大使を味方につけるところまではいかなかった。ただ主張をするだけでなく、



## Global Classrooms

他の大使の主張をまとめて会議全体を引っ張ろうという姿勢でいることが大切なのだと感じた。

2日目は5つの地域が集まり、全ての国連加盟国が参加する最も大きな規模の会議になった。朝全ての決議案が配られて、他地域の決議案がアフリカのものに比べてはるかに詳しく政策も広範囲を網羅していることに気づいた。このまま交渉に入ればアフリカの決議案は他地域に飲み込まれてしまい、アフリカ諸国の国益は全く反映されないのではないかと感じた。そこで初めはアフリカの決議案を修正しようと私達は試みたが、アフリカの決議案のスポンサーたちはそれぞれが大きな会場で別々にコンバイン交渉を始めてしまい、アmendは不可能だと判断した。私達はアフリカ全体でまとまる事はあきらめ、作戦を変更し、1日目に決議案作成の中心から私たちと同じようにはぐれてしまった国に一齐にアンケートメモを送ってそれぞれが入れたかった文言を聞いた。するとかなりの国の大使がやはり1日目の決議案に不満を抱いていたようで、私達に入れたい文言を共有してくれた。私達はそれらをまとめて、コンバインされた決議案を作成している大使と交渉し、なんとかいくつかの主張を最終的な決議に反映させる事が出来た。

2日目は1日目とは違い、出来る事はしたという達成感を感じた。結局ももとのアフリカの決議案は他地域の決議案に吸収され、全く存在感を示せなかった中で、私達は似たような境遇にいたアフリカの大使たちの意見をまとめ、わずかながらも決議に自分達の主張を入れることが出来た。アフリカ全体のリーダーになる事は出来なかったが、それでも小規模なグループを作り意見を集める事が出来たのは、1日目の反省を活かす事が出来たからだと思う。

今回の大会では、私達はジンバブエ大使であったのにも関わらず、「日本との違い」に何度も驚かされることになった。国際大会は日本大会と違って議論が理想主義的で、決議案にも非常に前向きな目標を何からなにまで詰め込んでいるという印象を受けた。1日目にアフリカの決議案をまとめたときにも、ろくに交渉もせずに内容の薄いペーパーを決議案として選んでしまったのにも関わらず、ほとんどの大使が満

足した様子だったことに私達は衝撃を受けた。しかし、「日本と違う」と感じたときにいかにその違いに対応するかが重要なのだ。日本人として持っている緻密さや現実的な視点も、相手を納得させるために使わなければ意味がないということに私達は気づかされた。その点で、国際的な場での議論の難しさを身を以て体験できたように思う。将来、今度は「模擬」ではなく私自身の立場から、またその難しさを味わう事になるだろう。そのときに日本人としての私が、国と国の違いを越えて相手を味方につけられるように、今回の経験を糧にしたいと考えている。



## Global Classrooms

光本 愛理  
聖心女子学院高等科3年

「Sustainable Development (持続可能な開発)」、これが私たちに割り当てられた議題であった。6月20日から実際にリオデジャネイロで行われる会議の議題ということもあり、新聞でも頻繁に取り上げられていた。持続可能な開発とは、将来の世代のニーズを満たす能力を損なうことなく、現在の世代のニーズを満たす開発のことであり、将来の世代を担う私たちが考えていかなければならない議題でもあった。そのため、全日本大会の際より現実世界と結びついている感じがしてやりがいがあった。真剣にリサーチを行い、日本とは立場が全く異なるジンバブエという途上国の立場から解決策を模索した。その結果、担当国の現状やこれまで行ってきた政策をまとめた Position Paper が評価され、Best position paper award を頂く事ができた。私達は帰国子女ではないため英語には自信がなかったのに、その分をリサーチでカバーしようと努力してきた。その努力が認められた事は大きな喜びと自信になった。しかしその一方で、国際大会は全日本大会と異なる部分も多く、自分たちの戦略不足のために、議場に大きなプレゼンスを残す事ができなかった事が大きな反省点である。ではここで、全日本大会とはどのように異なったのか、その違い三点を中心に国際大会を振り返っていく事としたい。

まず一点目に、国際大会で最も驚き感心したのは、アメリカ人をはじめとする他国の参加者は非常に主張の仕方が上手く、相手に伝える力を持っているということである。その主張の上手さが最も表れるのは、スピーチや Moderated Caucus といった公式発言である。彼らが何を主張したいのかは非常に明快であった。各国大使として何を達成したいのかがはっきりしており、それをぶれないように固持していた。また、間の取り方、強調の仕方、感情表現によって、その主張を容易に理解する事ができた。私の場合、自国の状況を長々と伝えることが多く、立案した政策の妥当性や実現可能性を詳細に説明することが多かった。しかし今考えるとその時に、自分が他国に何を伝えたいのかが明確には伝わらなかったのかもしれない。また、全日本大会を振り返ってみても、メモ回しを行うのに

精一杯でスピーチを軽視してしまっていたように思える。もっと議場の注目を集められるようなスピーチ作成への努力をすべきであったと省みた。更に国際大会では、Unmoderated Caucus で対話する際に皆の押しが強いことが非常に印象的であった。自分の意見に自信を持ち、相手の主張を即時に自分の主張に巻き込んでしまうような話し方には、つい私も納得してしまいそうになった。また、Point of inquiry や Point of order を多用し、躊躇せずにどんどん議長に質問をしていたのも彼らの主張の上手さの一因なのかもしれない。私は改めて自分の伝える力不足を反省した。

そして二点目に、様々な主張のやり取りの中では、論理的に反論し合うことがほとんどなかったことに気が付いた。つまり、私も含めて他国データのリサーチまで十分に行った参加者が少なかったことが原因であろう。そして、全体的な雰囲気としては論理より理想が優先され、自国の国益を無視してコンセンサスや国際益ばかりを追求しているように感じた。全日本大会の場合は、他国データまでを徹底的にリサーチし、相手の主張に対して論理的に反論して、その妥当性を崩していくことが多かったことを思い出した。

更に三点目として、DR グループ形成後の2日目について違和感があったことを振り返りたい。国際大会では、自分の主張が DR の一部に組み入れられると、それだけで目的を達成したと思込んでしまい、会議の後半では議題に全く関係のない話に耽っている人が大半だった。全日本大会の場合は、2日目の始めにグループとして何をしていくべきかを確認し、役割分担を決めてから行動するのに対して、国際大会では各人が違う DR メンバーと勝手に思うままに交渉をしたため非効率になってしまった。そして、DR グループとしてまとまって意見を発信しようという意識が弱まってしまったのだろう。

このような全日本大会と国際大会の相違点を振り返りながら、私は今後日本人として、国際社会に、特に平和構築においてどのように貢献していくべきかを考え直してみた。そこでまず頭に思い浮かんだ事は、日本人の緻密さ、真面目さを活かしていくという事である。今回の国



## Global Classrooms

際大会において私が日本人の特徴として最も感じた事は、リサーチなど果てしない作業をできる限り追求していくことで、現状を正確に受け止める力が高いという事である。そしてこれは、自国を知る、他国を正確に理解することに繋がるはずである。また、リサーチに基づき根拠を示しながら、実現可能な解決策を模索していくことで、国際社会の平和を一段ずつ確実に向上させる事に貢献出来るのではないかと考えた。このような側面は、現に日本が国連で押し進めている政策にも反映されているのではないだろうか。国連日本政府代表部を訪問した際に中前様が話して下さった事の1つに「Human Security（人間の安全保障）」というものがあった。戦争のない状態を平和と定義する国も多い中で日本は、個々の安全な生活、及び、圧政や貧困からくる圧迫や偏狭のない状態を保障する事で世界の平和を築いていこうとしているのだ。日本は、平和という漠然とした状態を具体的な一人一人の安穩とした生活の保障から築いていくことを目指している。これは、一歩ずつ確実に平和を築いていくことにも直結すると言えるだろう。

しかし同時に中前様が、「国連とは理想的な平和追求の場というより、実際は各国がどろどろと各国の利益を追求する場である」とおっしゃっていた意味を考えてみた。今回の国際大会では、圧政を行い、ガバナンスさえ整っていない途上国のジンバブエ大使を担当した。その際にまず国益を考えると、実際に国民の平和を保障することよりも、自国は圧政を強いる事なく貧困状態を改善しようと最大限の努力をしている、と他国に見せかける事が優先となってしまった。このことからその意味が推察できる。しかし、実際の利益追求の場では、お互いの国益の駆け引きの中でいかに主張を受け入れあっていくのか、協調性こそが必要になるのではないだろうか。そして、この協調性とは単に相手に合わせる事ではなく、自分たちはどこまでなら譲れるのか、何を一緒にできるのか、自分たちの立場から判断し具体的に行動することだと私は考える。PKOの中満様がおっしゃっていた「政府や誰かに期待し受動的になってはいけない」という言葉をこのような協調の場でもしっかりと受け止め実践して行きたい。

模擬国連国際大会を通して気がついた自分に足りなかった点、そして評価された点、その両方を持ってこそ今後の日本人としてどのように国際平和に貢献して行けばよいのか、その答えがあったのだろう。つまり、緻密なリサーチによる具体的な解決策や主張を提示するだけでなく、それを相手に受け入れてもらえるように納得させる力、伝える力の両方が必要になると改めて感じた。そして今後も、国際問題への正確な理解を深めていくと同時に、その解決に向けて協調性を持って行動したいと考えた。

最後に、本当に多くの皆様に支えて頂いて、国際大会という貴重な体験ができたことに心から感謝したい。そして全米大会に至るまでの全ての繋がりを大切に、このような経験を後輩へと引き継いでいきたいと思います。



## Global Classrooms

## 支援協力団体一覧

本派遣事業の実施にあたり多くの団体からご支援とご協力をいただきました。ここに厚くお礼申し上げますとともに、謹んでご芳名を掲載させていただきます。

## 後援

外務省  
経済産業省  
文部科学省  
国際連合広報センター  
国際連合大学  
日本国際連合協会

## 協賛

株式会社公文教育研究会  
メリルリンチ日本証券株式会社  
三菱商事株式会社  
株式会社新日本科学  
株式会社JTB  
トヨタ自動車株式会社  
一般財団法人凸版印刷三幸会  
株式会社ニチレイ  
株式会社講談社  
三井物産株式会社

株式会社ナガセ 東進ハイスクール  
学校法人高宮学園 代々木ゼミナール  
駿台予備学校

\*ご賛同順 6月1日現在

## 協力

理想科学工業株式会社  
日本航空株式会社  
読売新聞  
日本経済新聞  
株式会社リクルート

\*ご賛同順 6月1日現在

## 会計報告

本派遣事業に要する費用は、賛同して頂いた多数の企業の皆様のご寄付によって賄われています。本当に多くの方に支えられていることにあらためまして深く感謝いたします。

### 支出

渡航費	2,100,000
宿泊費	1,000,000
交通費	100,000
会議費	150,000
合計	3,350,000

### 収入

合計	3,350,000
----	-----------

\* 13社からご協賛いただきました

2012年6月14日  
グローバル・クラスルーム日本委員会



公益財団法人ユネスコ・アジア文化センターより

私ども、公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）は、2012年度よりメリルリンチ日本証券様から引継ぎ、高校模擬国連事業の共催団体としてこの度の国際大会派遣からご支援することになりました。グローバル・クラスルームの「次世代の国際人/グローバルなリーダーを育成する」という趣旨にご理解・ご賛同をいただき、ご支援・ご協力をいただいた団体・企業様には改めて厚く御礼申し上げます。

この度の高校模擬国連国際大会日本代表（GC Japan）の皆さん、素晴らしい成績を残していただき、有難うございました。皆さんの堂々とした主張、振る舞い、そして交渉能力にはとても感動し、また、アフリカ連合のジンバブエ担当ということでリサーチや準備も大変だったということは想像に難くありませんが、その中にあって3校は優秀賞（Honorable Mention）、1校はベストポジションペーパー賞を獲得されたことに、皆さんの努力が報われたと思えました。ニューヨークで出会った多くの方々も皆さんの活躍には喜びのメッセージ、JCGC関係者からも沢山お祝いのメッセージをいただいております。

今回残念ながら賞にもれた1校も与えられた短い時間のスピーチで堂々と主張でき、会議場でも精一杯ジンバブエの立場を守っていました。それは会場にいた他国のどこのチームよりも多く準備をして、夜遅くまで練習を繰り返していたらよかったと確信しました。

皆さんが得た素晴らしい評価は、OB/OGから何年も受け継がれてきた目に見えない財産に負うところも多く、また、皆さんが今回得た経験は貴重な財産として蓄積されます。そしてその財産をまた後輩に引き継いで行って欲しいと思います。

会議中、主催団体の方々や他国の引率の先生方と色々なお話をしましたが、一様に、GC Japanのリサーチ能力・準備は“Great!”とお褒めの言葉をいただきました。これは素晴らしい伝統でありOB/OGの皆様からの教えの一つです。恐らく皆さんのお宅には山のような模擬

国連関連の資料が積まれていると思います。書きかけのメモやノートが自室以外にも置いてあるのではないですか？是非皆さんの研究方法を高校の後輩にもお伝えし、また、大学生になっても未来のGC Japanや母校の模擬国連活動のお手伝いをしていただければとても嬉しいです。

また、今回の国際大会で得た経験や努力が、皆さんの将来のキャリア創造に役立ち、次世代の国際人/グローバルなリーダーに成るための一助になるなら、これ以上の喜びはありません。中満泉 DPKO Director が皆さんにお話しておられたように、「弱い人々の意見を聞けるリーダー」になってください。

最後になりますが、今回の国際大会派遣にご尽力いただいた関係各位の皆様には心より御礼申し上げます。今後も素晴らしい派遣事業でありますよう、ACCUとしても精一杯努めてまいります。ありがとうございました。

ユネスコ・アジア文化センター（ACCU : Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO）について

ACCUは、ユネスコ（国際連合教育科学文化機関）の基本方針に沿って、アジア太平洋地域諸国の文化の振興と相互理解に寄与することを目的に日本政府と民間の協力によって設立されました。

1971年（昭和46年）4月に発足し、同年7月には、1969年3月以来アジアの図書開発活動に積極的な役割を果たしていた財団法人ユネスコ東京出版センター（TBDC）を合併し、目的に沿って事業を推進してきました。

行政改革により、2011年（平成23年）10月内閣府公益等認定委員会から認可を受けて、11月1日に公益財団法人に移行しました。

ACCUは、ユネスコと緊密な連携を図りながら、アジア太平洋地域ユネスコ加盟国と協力して、教育協力、人物交流、文化協力の分野で、現地のニーズを反映した具体的な地域協力事業を数多く推進しています。



## グローバル・クラス ルーム日本委員会

(以下順不同、敬称略)

### アドバイザー・ボード

明石 康  
(財団法人国際文化会館理事長／元国連事務次長  
／日本国際連合協会副会長)

小林 いずみ  
(世界銀行グループ 多数国間投資保証機関  
(MIGA) 長官)

### 評議会

星野 俊也 (議長)  
(日本模擬国連創設者・OB／大阪大学 大学院公  
共政策研究科長／元・国連日本政府代表部公使参  
事官)

紀谷 昌彦  
(日本模擬国連 OB／防衛省地方協力局提供施設  
課長)

中満 泉  
(日本模擬国連 OG／国際連合平和維持活動局政  
策・評価・訓練部長)

島津 正数  
(公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター事  
務局長)

康 武司  
(公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター人  
物交流課高校模擬国連事業担当)

柿岡 俊一  
(埼玉県立浦和第一女子高等学校 教諭)

竹林 和彦  
(渋谷教育学園渋谷高等学校 教諭)

米山 宏  
(公文国際学園中等部・高等部 教諭)

大内 悠路 (理事長)  
(グローバル・クラスルーム日本委員会理事長／  
慶應義塾大学経済学部経済学科 2 年)

渡部 智 (研究担当)  
(グローバル・クラスルーム日本委員会理事／東  
京大学法学部 3 年)

上西 啓  
(2009 年国際大会派遣生／東京大学経済学部 3  
年)

衛藤 菜生  
(2010 年国際大会派遣生／東京医科大学医学部 2  
年)

### 理事会

大内 悠路 (理事長)  
(グローバル・クラスルーム日本委員会理事長／  
慶應義塾大学経済学部経済学科 2 年)

渡部 智 (研究担当)  
(グローバル・クラスルーム日本委員会理事／東  
京大学法学部 3 年)

伊藤 慎也  
(立教大学経済学部 3 年)

柴原 一貴  
(慶應義塾大学法学部政治学科 2 年)

青柳 拓真  
(東京大学教養学部 2 年)

古畑 拓真  
(明治大学法学部 2 年)

杉村 詠史  
(青山学院大学教育人間科学部 4 年)

高橋 淳志  
(早稲田大学政治経済学部 4 年)

### 事務局連絡先

E-mail: gc@jmun.org

## おわりに

国連とは国際社会の縮図です。それは、世界 193 の加盟国による最も普遍的な議論の場であり、その議論は人類全体の行く末を左右しかねないものなのです。国連での会議外交では、各国の国益が激しく対立する場面が多々ありますが、外交とは単なる国益のぶつかり合いではありません。各国は自らの国益を見極めながらも、同時に国際社会全体の共通利益を探り、一国では解決不能の諸問題に共同で対処していく、複雑でかつ創造的・建設的なプロセスが繰り広げられなければなりません。こうしたプロセスで必要な物は、相手を言い負かすためのロジックではなく、議題となる問題への深い知識や洞察、高度の判断力・交渉力そしてコミュニケーション能力などです。模擬国連は、知識とスキルをもとに、立場や考えを異にする人々の間で、積極的な国際協力を実現するための合意形成を進めるエクササイズとして、とても有益なものです。

今回日本から参加した若い「大使」たちは、ニューヨークにおいて本物の国連を間近に実感しながら、教科書では学ぶことのできない多くのことを体験し、これからの学びと研鑽の糧を得て帰国しました。

私たちの暮らす世界は、恐ろしいほどのスピードで変革しています。既存の考え方にとらわれず、創造的に、ダイナミックに課題に取り組み、世界の人々と協力し、またリーダーシップを発揮できる人材を日本からも数多く出す必要があります。私たちは、ニューヨークでの模擬国連会議に高校生を派遣する事業を、そのための小さな、しかし重要な活動のひとつと位置づけています。参加高校生が持ち帰る経験は、国連という限られた場のみならず、広く外交、ビジネス、研究などの場で有益なものであると確信しています。

米国国連協会からのご厚意と数多くの支援協力団体のご支援により、少数の有志によるグローバル・クラスルーム日本委員会が始めた高校生の日本代表団派遣支援事業は今回で 6 回目となりました。今回も代表団にご参加くださ

た各校のトップを含む教職員各位、保護者の皆様、そして生徒さんたちご自身がそれぞれ責任ある姿勢と冷静なご判断を胸に行動し、何ら問題なく派遣事業を終えられ、さらに優秀な業績を残してこられたことを私たち評議員は、心からの感謝と感激の思いで受け止めました。ありがとうございました。

また、毎回の派遣事業には大学生の全国組織である日本模擬国連による運営が不可欠ですが、大内理事長以下、代表団のためとなるよう誠実かつ効果的に準備に取り組んでくださったことに改めて厚く御礼を申し上げます。さらに、本事業への支援をお続けくださっている協賛/後援諸団体には感謝の言葉もございません。私たちとしては、多くの皆様のご支援とご期待を励みとし、グローバル・クラスルーム事業の更なる発展に一層の努力をしていく所存です。どうぞ今後ともご指導・ご支援のほど、よろしくお願い申し上げます。

グローバル・クラスルーム日本委員会  
評議会 議長 星野 俊也

## 参考

### 関連リンク

米国国連協会／UNA-USA  
<http://www.unausa.org/>

グローバル・クラスルーム／  
 Global Classrooms©  
<http://www.unausa.org/globalclassrooms>

2012 年高校模擬国連国際大会／  
 13th Annual global Classrooms International  
 Model UN Conference  
<http://www.unausa.org/unausamun>

グローバル・クラスルーム日本委員会／  
 Japan Committee for Global Classrooms  
<http://jmun.org/gc/>

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター／  
 Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO  
<http://www.accu.or.jp/>

### 関連報道

朝日新聞「実践女子学園高等学校が、ニュー  
 ヨークで開催される高校模擬国連全米大会に 5  
 月 17 日より出場」 5/11

日本経済新聞「国際模擬国連大会、日本の 4 高  
 校が入賞」 5/20

共同通信「模擬国連大会、日本は4高校入賞 英  
 語で国際交渉力競う」 5/20

北海道新聞、東奥日報、山形新聞、岩手日報、福  
 島民報、福島民友新聞、下野新聞、茨城新聞、千  
 葉日報、山梨日日新聞、新潟日報、静岡新聞、岐  
 阜新聞、北國新聞、福井新聞、神戸新聞、山陽新  
 聞、中國新聞、大阪日日新聞、山陰中央新報、四  
 国新聞、徳島新聞、高知新聞、大分合同新聞、宮  
 崎日日新聞、長崎新聞、佐賀新聞  
 等が上記記事をウェブ・紙面等で報道。